
「第1回みえ県民意識調査」 研究レポート

- 三重県民の幸福実感、その現状と課題 -

平成24年9月

三重県戦略企画部

みえ県民意識調査活用研究会

目次

(研究レポート)

研究レポートの目的	1
第1章 県民の幸福感の現状～属性別にみた姿～	2
第2章 幸福実感指標の現状	16
第3章 幸福感と他の実感の関係	33
第4章 県民の幸福実感向上のための政策課題等	42
顧問からのメッセージ(小野達也鳥取大学地域学部教授) 「意識調査を活用すること - みえ県民意識調査活用研究会の成果と今後への期待」	47
研究会の開催実績とメンバー	48

(資料編)

資料1 第1回みえ県民意識調査 調査票(関係分 抜粋)	資料編 1
資料2 分析の手法等	資料編 8
資料3 幸福感の属性別分析の詳細(第1章関係)	資料編 12
資料4 回答者の属性構成と県全体の構成との比較	資料編 68

研究レポートの目的

(みえ県民意識調査の経緯)

県では、「みえ県民力ビジョン」において「県民力でめざす『幸福実感日本一』の三重」を基本理念として掲げています。

そこで、県民の皆さんの幸福実感を把握するため、県内にお住まいの20歳以上の方10,000人を対象に、平成24年1月から2月にかけて「第1回みえ県民意識調査」を実施し、平成24年5月に、その結果を公表したところです。

(研究の目的)

みえ県民意識調査は、県民の皆さんの幸福実感を把握し、県政の運営に活用しようと、新しく実施したところですが、一方で、主観的な幸福実感に焦点を当てた初めての調査でもあり、実施時点では、その結果をどこまで政策議論等に活用できるのか、未知数でもありました。

単純なデータ集計により、幸福実感の現状値などを把握することはできましたが、しかしながら、政策議論等に直接つながるような成果を示すまでには至っていませんでした。

そこで、調査データをもとに、県民の幸福実感の向上と政策のあり方について議論を喚起し、深めていけるような情報を提供するため、戦略企画部内に「みえ県民意識調査活用研究会」を設け、専門家の助言も得ながら、さらに踏み込んで分析を進めてきたところです。

(分析を進めるにあたり、特に重視したこと)

- ・どの項目が県民の幸福実感に影響を与えるのか、あるいは、どの政策が幸福実感の向上によりつながるのか、といった視点に立つこと。
- ・統計的手法により分析を行うとともに、統計的な有意性の有無について確認すること。
- ・データから読み取れる観察的事実と、そこから得られる仮説や検討課題等を区別して整理すること。

(レポートの構成等)

項目	内容
第1章 県民の幸福実感の現状	幸福実感に影響を与えているものは何かを探るため、幸福感を属性別に細分化の上、「日ごろの暮らしについての実感」と合わせ、特徴や傾向を抽出
第2章 幸福実感指標の現状	「みえ県民力ビジョン」に掲げる16の幸福実感指標に対応する「地域や社会の状況についての実感」を、属性別に分析
第3章 幸福実感と他の実感との関係	幸福実感に影響を与える項目、幸福実感の向上に重要な項目等について考察するため、幸福実感とその他の実感の関係について統計的に分析
第4章 県民の幸福実感向上のための政策課題等	分析データから読み取れる観察的事実をもとに、県民の幸福実感を高めるための政策課題などについて考察

(備考)

- ・このレポートでは、10点満点で調査した日ごろ感じている幸福実感についてのみ「幸福実感」として記述し、地域や社会の状況や日ごろの暮らしについての実感を含む県民の主観的な実感全体については、「幸福実感」として記述しています。
- ・スペース等の都合上、選択肢の表現等を趣旨が変わらない程度に簡略化して記述しています。
- ・統計的や手法や詳細な分析等については、資料編としてまとめています。

第1章 県民の幸福度の現状 ～属性別にみた姿～

分析の考え方

第1回みえ県民意識調査の問1では、日ごろ感じている幸福度について、内閣府の国民生活選好度調査の質問に準じ、10点満点で質問し、5,710人の方からいただいた回答を集計しました。

その結果、県全体の平均値は6.56点となり、また、女性の平均値が男性の平均値より高いことや、年代別では30歳代が最も平均値が高いことなど、県民の皆さんの幸福度に関するさまざまなデータが得られました。

これらのデータは、県民の皆さんの幸福度の現状を知る貴重な手がかりであり、どういった県民の皆さんがより幸福度が高いのか、何が幸福度に影響を与えているのかといったことを、できるだけ明らかにしていきます。

(分析の進め方)

第1章では、この調査で質問した7つの属性(性、年代、職業、結婚、世帯構成、世帯収入、地域)を2つ以上組み合わせることにより、幸福度の平均値を細分化し、どのカテゴリーが幸福度が高いのか、或いは低いのかなど、特徴や傾向を抽出しました。

また、幸福度に影響を与えるものは何なのかを探るため、幸福度について特徴の見られたカテゴリーについて、問3(日ごろの暮らしの実感)の12項目とクロス集計を行い、日ごろの暮らしの実感の状況を把握しました。

(参考)

ここでは、幸福度の平均値の差や日ごろの暮らしの実感の回答割合の差について、それらの差には統計的に有意性があるかどうかについて検証を行い、基本的には、統計的に有意性のある差を特徴や傾向等としてまとめています。

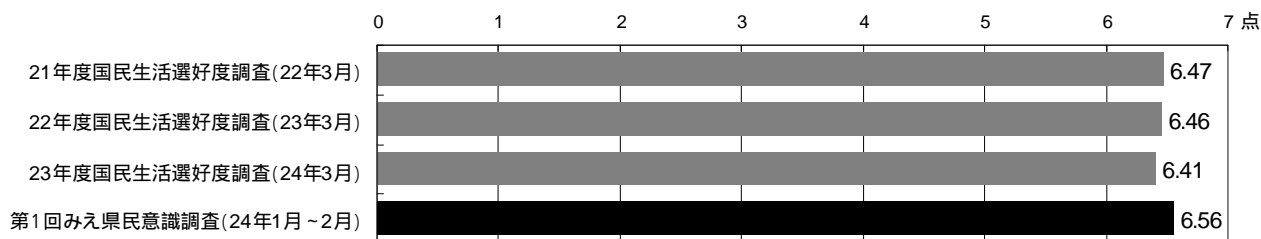
調査票は資料編1～7頁に掲載

統計的な手法の詳細については資料編8頁に掲載

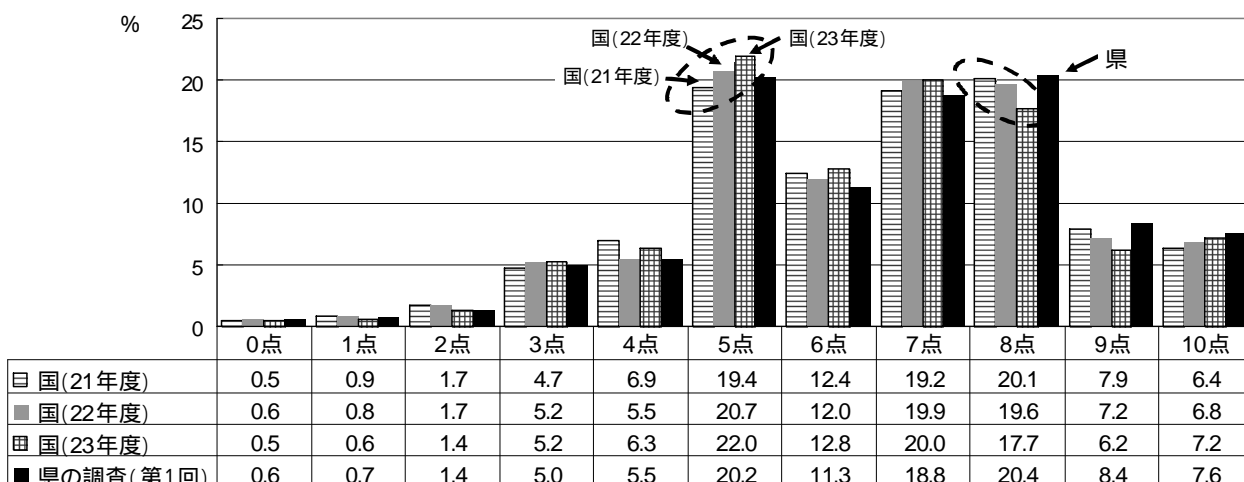
分析結果

1 県の調査と内閣府の国民生活選好度調査（平成21年度から23年度）との比較

図表：県の調査と内閣府の国民生活選好度調査における幸福度の平均値の比較



図表：県の調査と内閣府の国民生活選好度調査における幸福度の点数の分布



図表：第1回みえ県民意識調査と平成23年度国民生活選好度調査における調査方法の違い

	第1回みえ県民意識調査	平成23年度国民生活選好度調査
調査時期	平成24年1月～2月	平成24年3月
標本数	県内居住の男女 10,000人	全国に居住する男女 4,000人
有効回答数(率)	5,710 (57.1%)	2,802 (70.1%)
調査対象	20歳以上	15歳から80歳
実施方法	郵送法	調査員による個別訪問留置法

【要点】

内閣府の国民生活選好度調査における幸福度の平均値は低下しています。

みえ県民意識調査と国民生活選好度調査では調査方法が同一ではないことから、単純な比較は出来ませんが、県民全体の幸福度は国民全体の幸福度よりも高くなっています。

また、幸福度の点数の分布をみると、国、県の調査いずれも、5点と8点の割合が高いIM字の曲線を描いていますが、国の調査では5点の割合が増加し、最も高くなっているのに対し、県の調査では8点の割合が最も高くなっています。

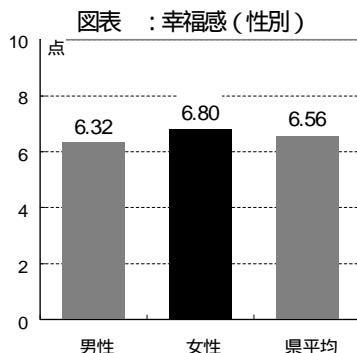
2 一属性のクロス分析

県民の幸福度の特徴や傾向を把握するスタートとして、みえ県民意識調査で質問した7つの属性(性別、年代、職業、結婚、世帯構成、世帯収入、地域)によるクロス分析(細分化)を行いました。

(1) 性別

性別の幸福度を見たところ、女性の方が男性より高くなっています。

詳細な情報は資料編12頁に掲載

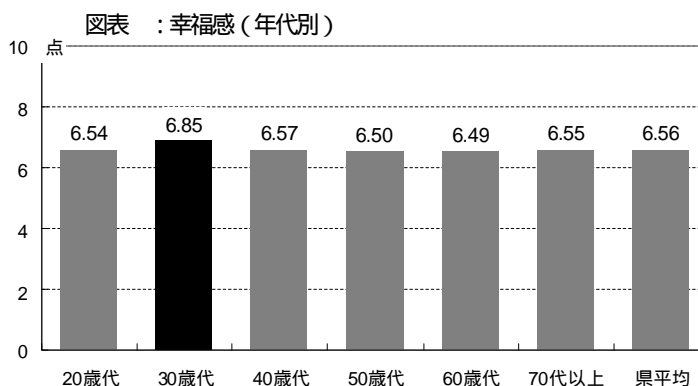


(2) 年代別

年代別の幸福度を見たところ、30歳代が県平均より高くなっています。

30歳代以外の年代と県平均との間に、統計的に有意な差は見られません。

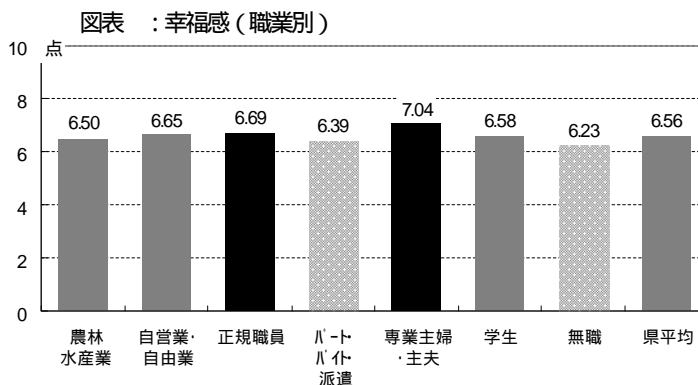
詳細な情報は資料編13～15頁に掲載



(3) 職業別

職業別の幸福度を見たところ、県平均より、正規職員と専業主婦・主夫が高く、パート・バイト・派遣と無職が低くなっています。

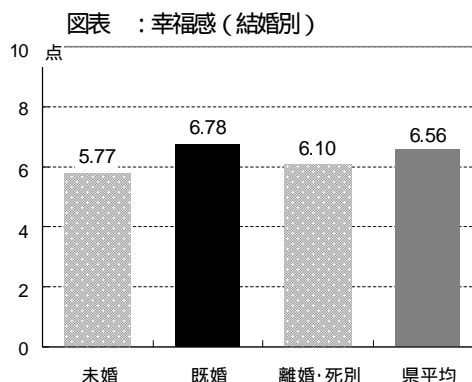
詳細な情報は資料編16～18頁に掲載



(4) 結婚別

結婚別の幸福度を見たところ、既婚が最も高く、次いで離婚・死別、未婚の順となっています。

詳細な情報は資料編19～20頁に掲載

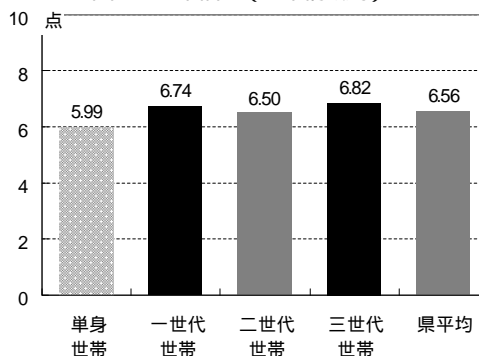


(5) 世帯構成別

世帯構成別の幸福度を見たところ、県平均より、単身世帯が低く、一世代世帯と三世代世帯が高くなっています。

詳細な情報は資料編21～22頁に掲載

図表：幸福度（世帯構成別）



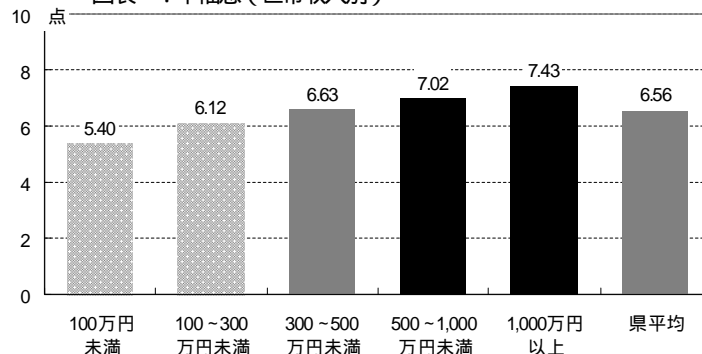
(6) 世帯収入別

世帯収入別の幸福度を見たところ、県平均より、300万円未満の層が低く、500万円以上の層が高くなっています。

300～500万円未満の層が県平均とほぼ同じ水準にあります。

詳細な情報は資料編23～25頁に掲載

図表：幸福度（世帯収入別）



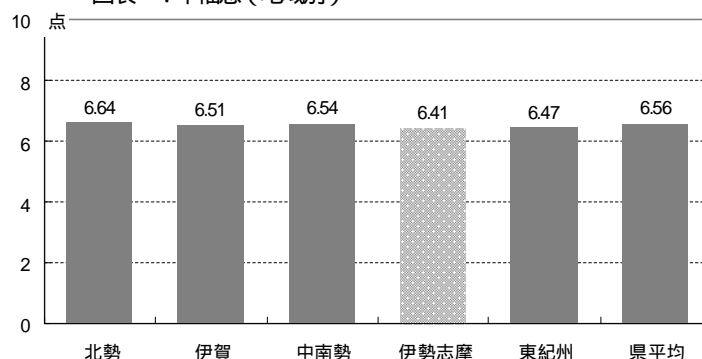
(7) 地域別

地域別の幸福度を見たところ、他の属性と比べ、差は小さくなっています。

その中で、伊勢志摩地域は県平均より低くなっていますが、それ以外の地域と県平均との間に、統計的に有意な差は見られません。

詳細な情報は資料編26～27頁に掲載

図表：幸福度（地域別）



(参考) 4 - 5頁における

- 黒色：幸福度の平均値が県平均より高く、かつ統計的に有意な差がある属性項目
- 網かけ：幸福度の平均値が県平均より低く、かつ統計的に有意な差がある属性項目
- 灰色：幸福度の平均値が県平均と比べ、統計的に有意な差が認められない属性項目

【要点】

属性別の幸福度については、職業別、結婚別、世帯構成別、世帯収入別で大きな差がみられる一方、年代別や地域別では差は小さくなっています。

個々人の幸福度はさまざまな要因に影響を受けると考えられることから、県民の幸福度の特徴や傾向をより詳細に把握するためには、この一属性によるクロス分析（細分化）だけでなく、二以上の属性によるクロス分析の結果も合わせて見ていく必要があると考えられます。

3 二以上の属性によるクロス分析

県民の幸福度の特徴や傾向をより詳細に把握するため、7つの属性（性、年代、職業、結婚、世帯構成、世帯収入、地域）を二つ（必要に応じて三つ）組み合わせてクロス分析を行いました。

二属性の組み合わせは下記の21通りがあり、中でも特徴的な傾向が見られた組み合わせ（下表の網かけ部分）の要点を次ページ以降にまとめました。

図表：二属性の組み合わせと第1章における記載箇所

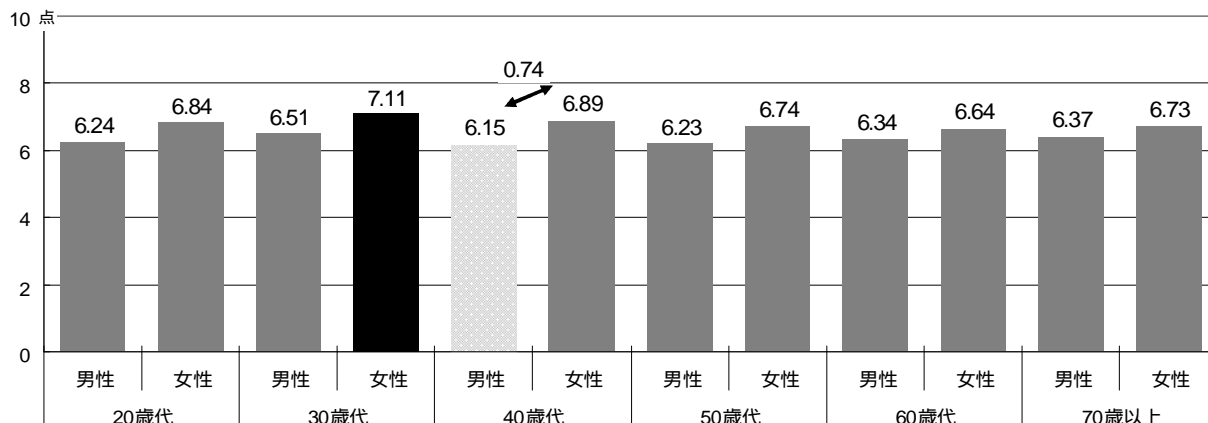
No	二属性の組み合わせ		第1章における記載箇所	資料編の掲載箇所
1	性別	× 年代別	3 (1) … 7 頁	資料編 28 ~ 30 頁
2	性別	× 職業別	3 (2) … 8 頁	資料編 31 ~ 33 頁
3	性別	× 結婚別	3 (3) … 9 頁	資料編 34 ~ 36 頁
4	性別	× 世帯構成別		資料編 37 ~ 38 頁
5	性別	× 世帯収入別		資料編 39 ~ 40 頁
6	性別	× 地域別		資料編 41 頁
7	年代別	× 職業別	3 (4) … 10 頁	資料編 42 ~ 43 頁
8	年代別	× 結婚別		資料編 44 ~ 45 頁
9	年代別	× 世帯構成別	3 (5) … 11 頁	資料編 46 ~ 47 頁
10	年代別	× 世帯収入別	3 (6) … 12 頁	資料編 48 頁
11	年代別	× 地域別		資料編 49 ~ 50 頁
12	職業別	× 結婚別	3 (7) … 13 頁	資料編 51 ~ 52 頁
13	職業別	× 世帯構成別		資料編 52 ~ 54 頁
14	職業別	× 世帯収入別		資料編 55 頁
15	職業別	× 地域別		資料編 56 頁
16	結婚別	× 世帯構成別		資料編 57 ~ 58 頁
17	結婚別	× 世帯収入別	3 (8) … 14 頁	資料編 59 ~ 61 頁
18	結婚別	× 地域別		資料編 62 頁
19	世帯構成別	× 世帯収入別	3 (9) … 15 頁	資料編 63 ~ 64 頁
20	世帯構成別	× 地域別		資料編 65 頁
21	世帯収入別	× 地域別		資料編 66 ~ 67 頁

第1章に記載していない組み合わせも含め、21通りの詳細な分析は、資料編として別途記載しています。

3(1) 性別×年代別

詳細な情報は、資料編28～30頁に掲載

図表：幸福度（性別×年代別）



図表：暮らしの実感

（最も幸福度が高い30歳代女性と女性全体）

暮らしの実感（単位：%）	30歳代女性	女性全体	差
「自由な時間」がある	62.3	76.6	14.3
「相談できる友人や知人」がいる	89.3	80.0	9.3
「生きがい」がある	77.3	68.2	9.1
「家族との関係」が良好である	91.2	84.6	6.6

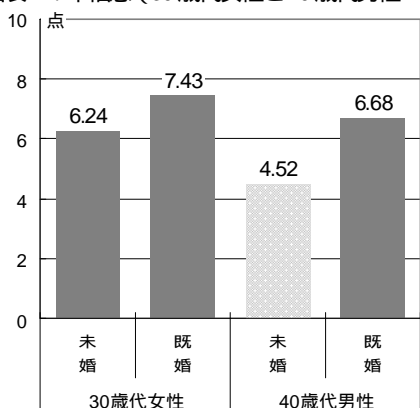
図表：暮らしの実感

（最も幸福度が低い40歳代男性と男性全体）

暮らしの実感（単位：%）	40歳代男性	男性全体	差
「職場の人間関係」は良好である	71.9	57.2	14.7
「仕事は充実」している	59.6	50.6	9.0
「自由な時間」がある	65.3	78.6	13.3
「精神的なゆとり」がある	46.7	60.0	13.3

暮らしの実感の割合は「感じる」、「どちらかといえば感じる」の合計（以下、同じ）

図表：幸福度（30歳代女性と40歳代男性×結婚別）



図表：暮らしの実感（40歳代男性×結婚別）

暮らしの実感（単位：%）	40歳代・男性		差
	未婚	既婚	
「生きがい」がある	32.4	70.2	37.8
「精神的なゆとり」がある	21.1	54.2	33.1
「必要な収入」がある	43.7	73.1	29.4
「職場の人間関係」は良好である	54.9	76.7	21.8
「家族との関係」が良好である	66.2	87.6	21.4

【要点】

いずれの年代でも女性が男性より幸福度が高くなっています。

最も幸福度が高いのは30歳代女性で、女性全体より「自由な時間」はないものの、「相談できる友人や知人」や「生きがい」があり、「家族との関係」が良好であると感じています。

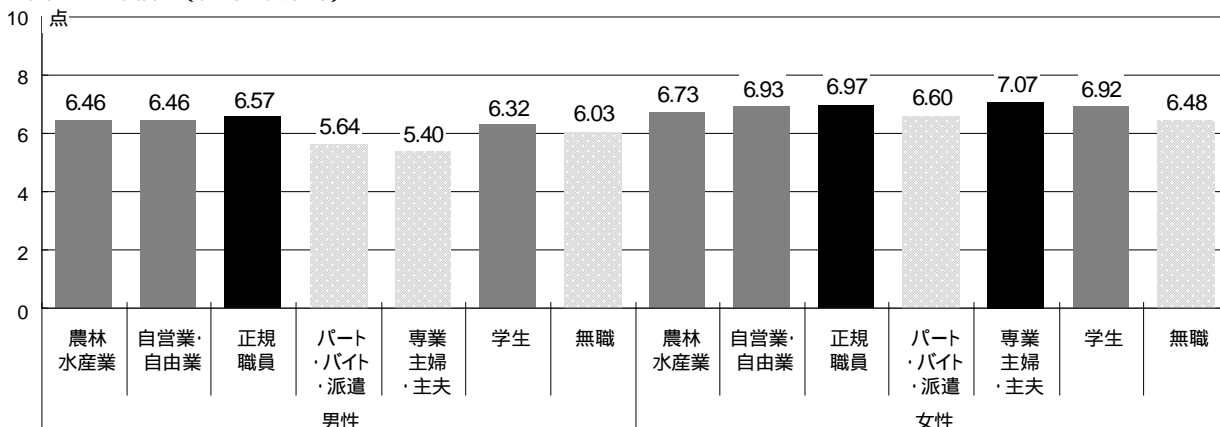
最も幸福度が低いのは40歳代男性で、男性全体より「仕事は充実」し、「職場での人間関係」は良好であるものの、「自由な時間」や「精神的なゆとり」がないと感じています。

さらに30歳代女性と40歳代男性を結婚別に見ると、いずれも既婚より未婚の方が幸福度は低くなっています。特に未婚の40歳代男性の幸福度が低く、既婚の40歳代男性より、「生きがい」や「精神的なゆとり」、「必要な収入」がなく、「職場での人間関係」や「家族との関係」が良好でないと感じています。

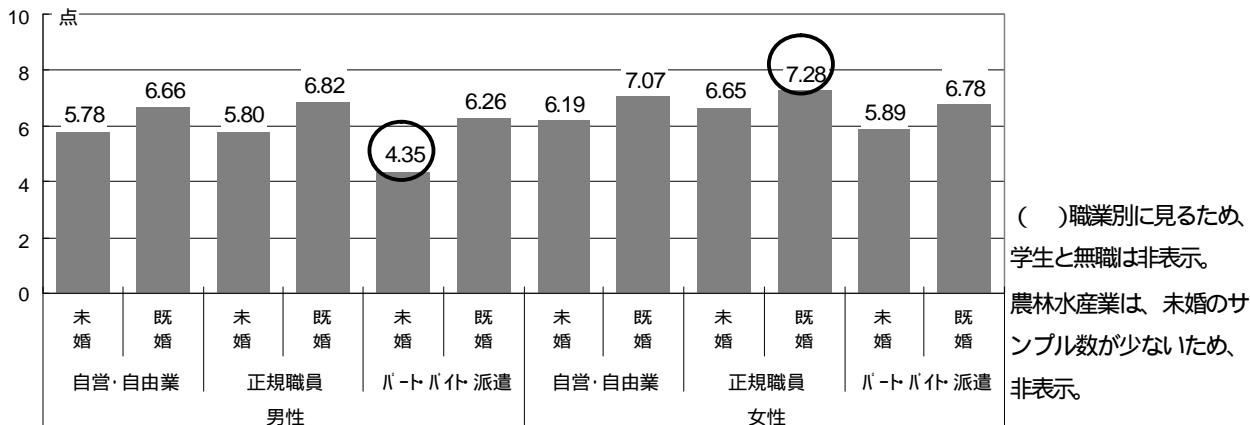
3(2) 性別×職業別

詳細な情報は、資料編31～33頁に掲載

図表：幸福感（性別×職業別）



図表：幸福感（性別×職業別×結婚別）



図表：暮らしの実感（男性×パート・バイト・派遣×結婚別）

暮らしの実感 (単位: %)	男性 パート・バイト・派遣		差
	未婚	既婚	
「必要な収入」がある	40.0	64.6	24.6
「精神的なゆとり」がある	41.8	63.9	22.1
「生きがい」がある	47.3	63.9	16.6
「家族との関係」が良好である	70.9	83.3	12.4

図表：暮らしの実感（女性×正規職員×結婚別）

暮らしの実感 (単位: %)	女性・正規職員		差
	既婚	未婚	
「自由な時間」がある	58.6	75.9	17.3
「余暇は充実」している	60.9	75.9	15.0
「生きがい」がある	75.6	60.2	15.4
「ご近所付き合いや地域活動」をしている	55.3	18.0	37.3

【要点】

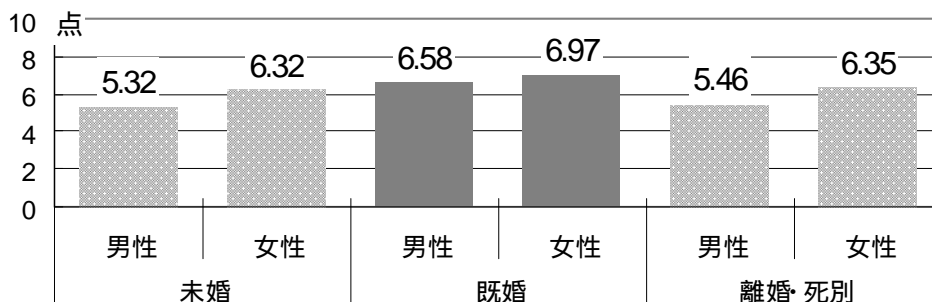
男性は、正規職員の幸福感が高く、パート・バイト・派遣、無職及び専業主夫の幸福感が低くなっています。男性の幸福感について、職業・結婚別でみると、いずれも既婚の幸福感が高くなっています。特に未婚のパート・バイト・派遣の幸福感が低く、既婚のパート・バイト・派遣より、「必要な収入」や「精神的なゆとり」、「生きがい」がなく、「家族との関係」が良好でないと感じています。

女性は、正規職員及び専業主婦の幸福感が高く、パート・バイト・派遣及び無職の幸福感が低くなっています。女性の幸福感について、職業・結婚別にみると、いずれも既婚の幸福感が高く、特に、既婚女性の正規職員は専業主婦より幸福感が高い傾向が見られます。既婚女性の正規職員は、未婚女性の正規職員より、「自由な時間」がなく、「余暇は充実」していないものの、「生きがい」があり、「ご近所付き合いや地域での活動」をしていると感じています。

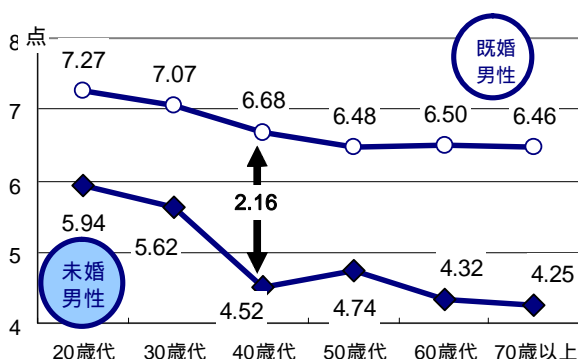
3(3) 性別×結婚別

詳細な情報は、資料編34～36頁に掲載

図表：幸福感（性別×結婚別）



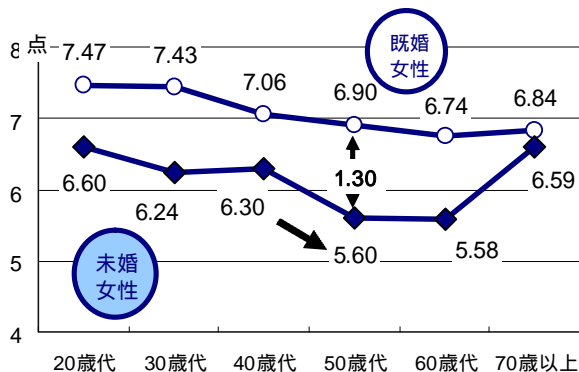
図表：幸福感（男性×結婚別×年代別）



図表：暮らしの実感（未婚×男性×30歳代と40歳代）

暮らしの実感 (単位: %)	未婚・男性		差
	40歳代	30歳代	
「精神的なゆとり」がある	21.1	52.5	31.4
「生きがい」がある	32.4	62.6	30.2
「必要な収入」がある	43.7	61.6	17.9
「仕事は充実」している	33.8	52.5	18.7
「家族との関係」が良好である	66.2	83.8	17.6

図表：幸福感（女性×結婚別×年代別）



図表：暮らしの実感（未婚×女性×40歳代と50歳代）

暮らしの実感 (単位: %)	未婚・女性		差
	50歳代	40歳代	
「ご近所付き合いや地域活動」をしている	33.3	18.4	14.9
「家族との関係」が良好である	63.0	86.8	23.8
「自由な時間」がある	63.0	86.8	23.8
「精神的なゆとり」がある	44.4	65.8	21.4

【要点】

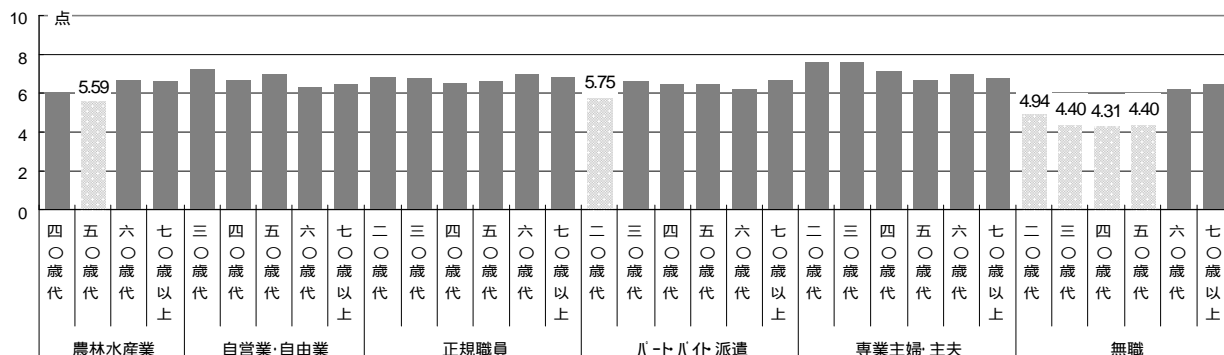
男女とも、未婚、離婚・死別より既婚の幸福度が高く、特に男性はその傾向が強くなっています。未婚の男性は40歳代で幸福度が大きく低下し、30歳代の未婚男性よりも、「精神的なゆとり」や「生きがい」、「必要な収入」がなく、また「仕事は充実」しておらず、「家族との関係」が良好でないと感じています。

未婚の女性は、50歳代で幸福度が大きく低下し、40歳代の未婚女性よりも、「ご近所付き合いや地域での活動」はしているものの、「家族との関係」が良好でなく、「自由な時間」や「精神的なゆとり」がないと感じています。

3(4) 年代別×職業別

詳細な情報は、資料編42～43頁に掲載

図表：幸福感(年代×職業別)



サンプル数が10未満の属性、及び年代別の偏りが大きい学生は非表示とした

図表：暮らしの実感(50歳代×農林水産業と全体)

暮らしの実感 (単位: %)	50歳代		差
	農林水産業	全体	
「ご近所付き合いや地域活動」をしている	86.2	57.3	28.9
「余暇は充実」している	37.9	56.7	18.8
「必要な収入」がある	55.2	71.6	16.4

図表：暮らしの実感(20歳代×パート・バイト・派遣と正規職員)

暮らしの実感 (単位: %)	20歳代		差
	パート・バイト・派遣	正規職員	
「必要な収入」がある	43.3	73.8	30.5
「仕事は充実」している	40.3	68.6	28.3
「家族との関係」が良好である	71.6	91.9	20.3

図表：暮らしの実感(20～50歳代×無職と全体)

暮らしの実感 (単位: %)	20～50歳代		差
	無職	全体	
「必要な収入」がある	14.7	69.0	54.3
「生きがい」がある	42.1	69.0	26.9
「精神的なゆとり」がある	38.9	58.2	19.3
「家族との関係」が良好である	64.2	85.8	21.6

【要点】

50歳代の農林水産業、20歳代のパート・バイト・派遣及び20～50歳代の無職の幸福度が特に低くなっています。

50歳代の農林水産業は、50歳代全体より「ご近所付き合いや地域活動」をしているものの、「余暇は充実」しておらず、「必要な収入」がないと感じています。

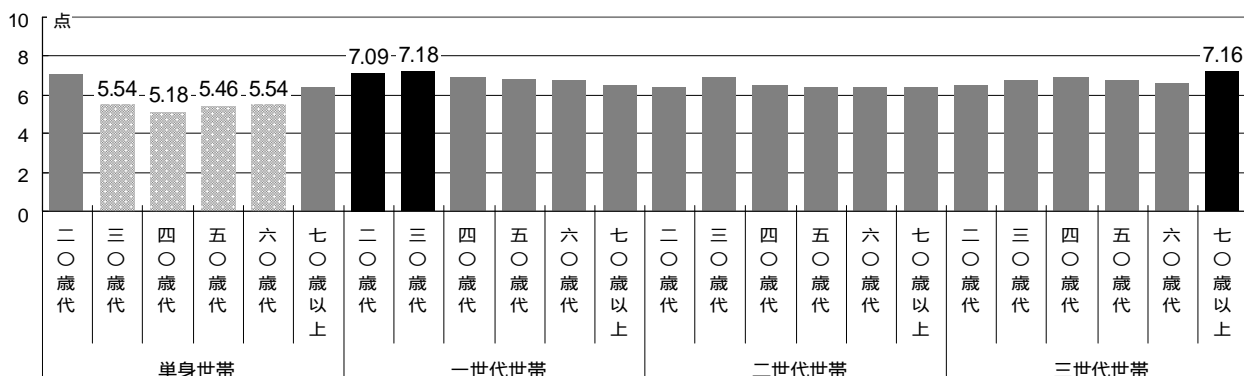
20歳代のパート・バイト・派遣は、20歳代の正規職員より、「必要な収入」がなく、「仕事は充実」しておらず、「家族との関係」が良好でないと感じています。

20歳代から50歳代の無職は、全体より、「必要な収入」や「生きがい」、「精神的なゆとり」がなく、「家族との関係」が良好でないと感じています。

3(5) 年代別×世帯構成別

詳細な情報は、資料編46～47頁に掲載

図表：幸福感(年代別×世帯構成別)



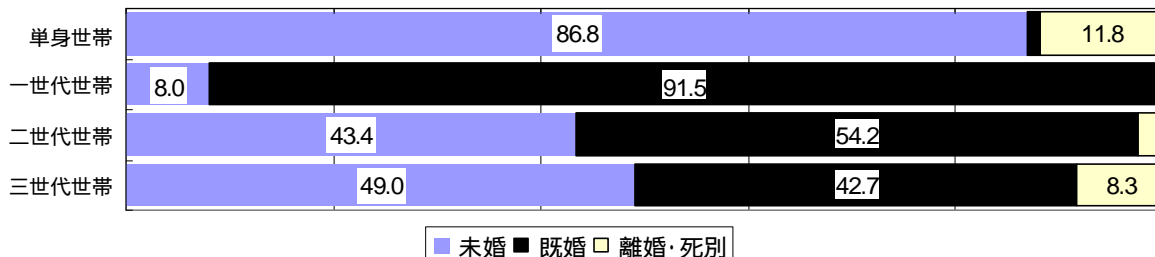
図表：暮らしの実感(30～60歳代×単身世帯とそれ以外)

暮らしの実感 (単位: %)	30～60歳代		差
	単身	単身以外	
「家族との関係」が良好である	59.2	86.4	27.2
「職場での人間関係」が良好である	50.2	61.7	11.5
「生きがい」がある	49.3	68.1	18.8
「必要な収入」がある	59.2	70.3	11.1

図表：暮らしの実感(70歳以上×三世代会世帯とそれ以外)

暮らしの実感 (単位: %)	70歳以上		差
	三世代	三世代以外	
地域は「住みやすい」	88.1	78.8	9.3
「生きがい」がある	72.8	63.8	9.0
「家族との関係」が良好である	89.1	82.8	6.3
「健康」である	65.8	59.7	6.1

図表：20～30歳代の世帯構成毎の結婚別の割合



【要点】

30歳代から60歳代の単身世帯は幸福度が低く、同年代の単身世帯以外の世帯より、「家族との関係」や「職場での人間関係」が良好でなく、「必要な収入」や「生きがい」がないと感じています。

70歳以上の三世代会世帯の幸福度は高く、同年代の三世代会世帯以外の世帯より、地域は「住みやすく」、「生きがい」があり、「家族との関係」が良好で、「健康」であると感じています。

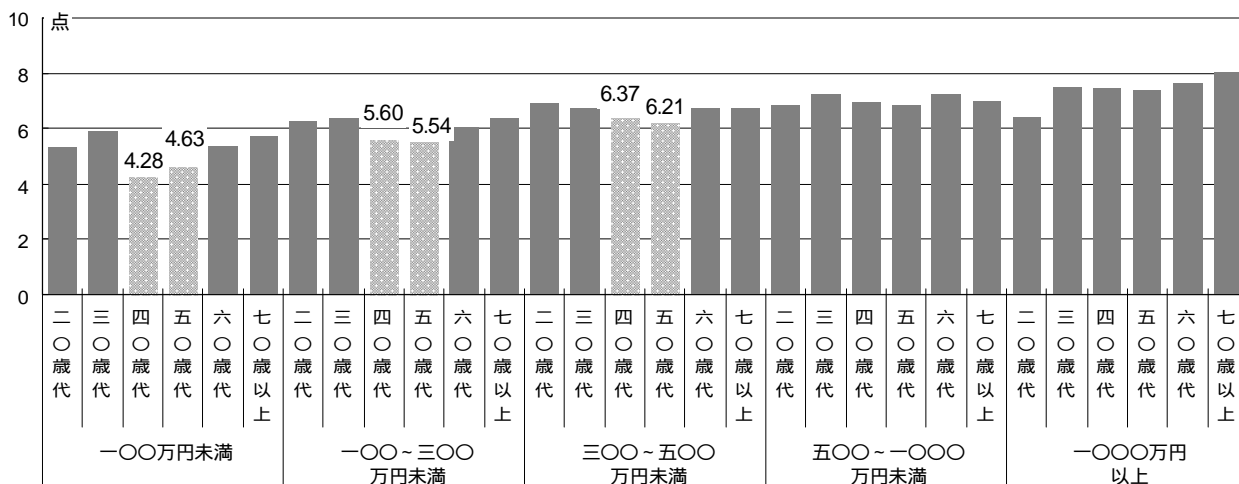
20歳代と30歳代の一世代世帯の幸福度は高くなっています。

なお、20歳代と30歳代について、世帯構成毎に結婚別の割合を見ると、幸福度の高い一世代世帯はほとんど既婚が占めています。

3(6) 年代別×世帯収入別

詳細な情報は、資料編48頁に掲載

図表：幸福度(年代別×世帯収入別)



図表：暮らしの実感(世帯収入0～500万円未満×40～50歳代と全年代)

暮らしの実感 (単位: %)	世帯収入 0～500万円未満		差
	40～50歳代	全年代	
「精神的なゆとり」がある	47.2	59.1	11.9
「必要な収入」がある	49.3	59.2	9.9
「自由な時間」がある	69.2	78.8	9.6
「余暇は充実」している	48.8	60.9	12.1

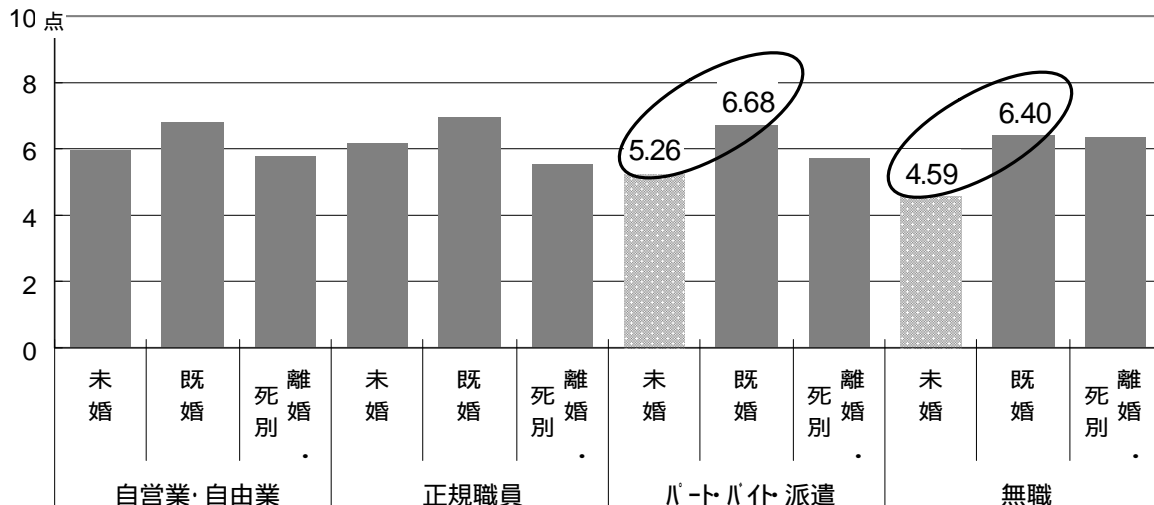
【要点】

40歳代と50歳代は、世帯収入が500万円未満の層において、他の年代と比べ幸福度が低い傾向にあり、全年代より、「精神的なゆとり」や「必要な収入」、「自由な時間」がなく、「余暇は充実」していないと感じています。

3(7) 職業別×結婚別

詳細な情報は、資料編51～52頁に掲載

図表：幸福感（職業別×結婚別）



農林水産業は未婚のサンプル数が10未満であり、専業主婦・主夫及び学生は結婚別の比較に意味がないため非表示とした

図表：暮らしの実感（パート・バイト・派遣×結婚別）

暮らしの実感 (単位: %)	パート・バイト・派遣		差
	未婚	既婚	
「ご近所付き合いや地域活動」をしている	17.6	62.0	44.4
「必要な収入」がある	47.1	70.1	23.0
「生きがい」がある	58.1	69.7	11.6
「家族との関係」が良好である	74.3	85.4	11.1

図表：暮らしの実感（無職×結婚別）

暮らしの実感 (単位: %)	無職		差
	未婚	既婚	
「家族との関係」が良好である	52.4	85.4	33.0
「必要な収入」がある	26.2	60.1	33.9
「精神的なゆとり」がある	39.8	65.0	25.2
「生きがい」がある	41.7	60.3	18.6

【要点】

いずれの職業においても、未婚は既婚より幸福感が低く、中でも、パート・バイト・派遣及び無職の未婚が低くなっています。

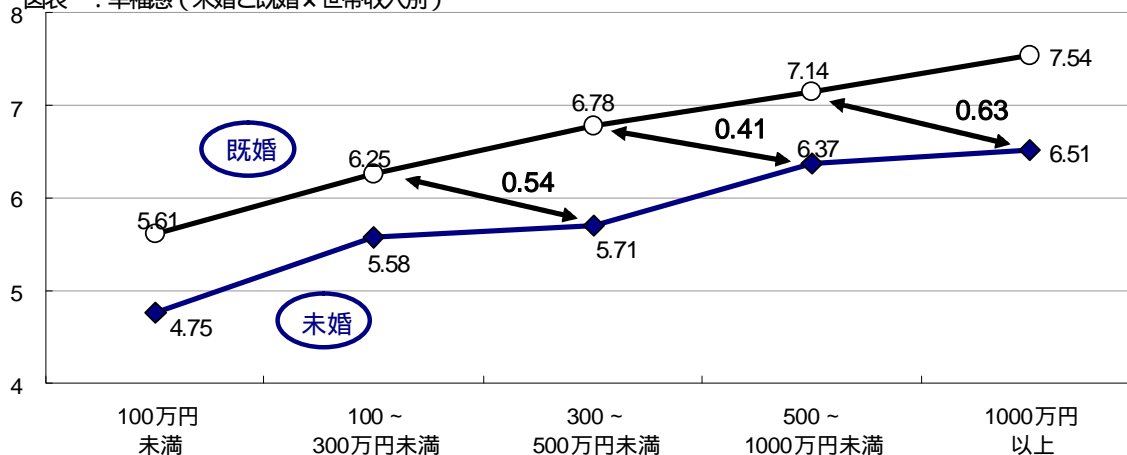
未婚のパート・バイト・派遣は、既婚より、「ご近所付き合いや地域での活動」をしておらず、「必要な収入」や「生きがい」がなく、「家族との関係」が良好でないと感じています。

未婚の無職は、既婚より、「家族との関係」は良好でなく、「必要な収入」や「精神的なゆとり」、「生きがい」がないと感じています。

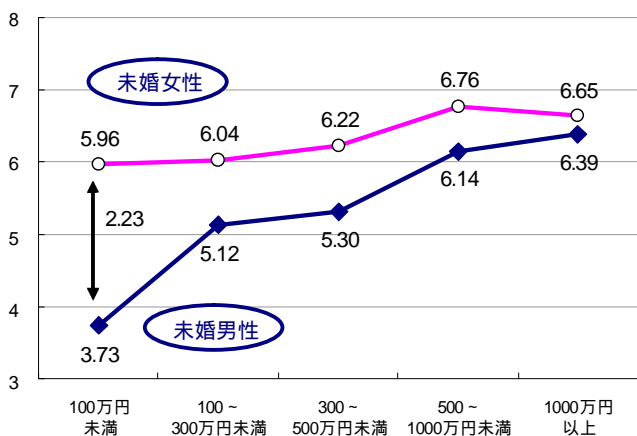
3(8) 結婚別×世帯収入別

詳細な情報は、資料編59～61頁に掲載

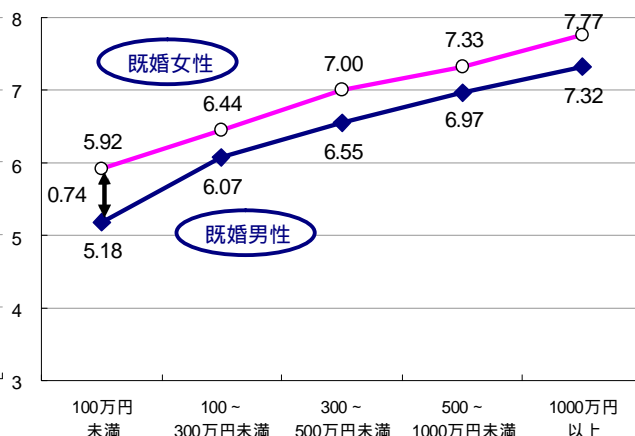
図表：幸福感（未婚と既婚×世帯収入別）



図表：幸福感（性別×未婚×世帯収入別）



図表：幸福感（性別×既婚×世帯収入別）



図表：暮らしの実感（世帯収入500万円未満×男性×結婚別）

暮らしの実感（単位：%）	世帯収入500万円未満の男性		差
	未婚	既婚	
「精神的なゆとり」がある	40.2	60.4	20.2
「必要な収入」がある	41.9	57.6	15.7
「生きがい」がある	51.0	64.4	13.4
「余暇は充実」している	48.1	61.3	13.2

【要点】

既婚は世帯収入が一つ高い層の未婚よりも幸福感が高い傾向にあります。

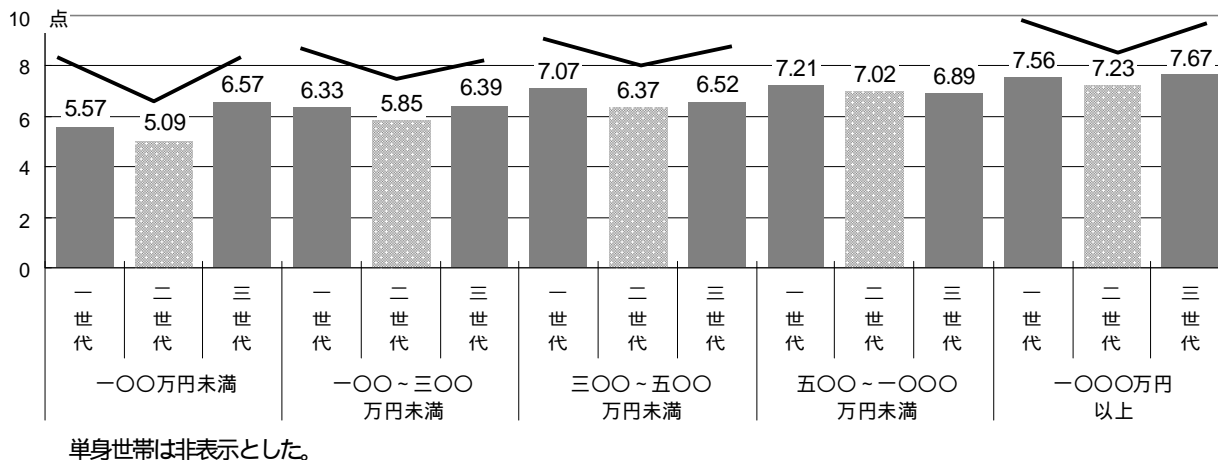
また、幸福感の男女差は未婚の方が大きく、特に世帯収入が低くなるほど未婚男性の幸福感の落ち込みが顕著となっています。

世帯収入500万円未満の未婚男性は、同じ世帯収入の層の既婚男性より、「精神的なゆとり」や「必要な収入」、「生きがい」がなく、「余暇は充実」していないと感じています。

3(9) 世帯構成別×世帯収入別

詳細な情報は、資料編63～64頁に掲載

図表：幸福度（世帯構成別×世帯収入別）



図表：暮らしの実感（世帯収入100～500万円未満×一世代世帯と二世帯世帯）

暮らしの実感（単位：%）	世帯収入100～500万円未満の層		差
	二世帯世帯	一世代世帯	
「自由な時間」がある	72.8	85.7	12.9
「精神的なゆとり」がある	55.4	66.7	11.3
「必要な収入」がある	57.2	68.3	11.1
「余暇は充実」している	56.0	68.9	12.9

図表：暮らしの実感（世帯収入100～500万円未満×二世帯世帯と三世帯世帯）

暮らしの実感（単位：%）	世帯収入100～500万円未満の層		差
	二世帯世帯	三世帯世帯	
「自由な時間」がある	72.8	72.7	0.1
「精神的なゆとり」がある	55.4	55.0	0.4
「必要な収入」がある	57.2	52.2	5.0
「余暇は充実」している	56.0	58.1	2.1

【要点】

二世帯世帯は、一世代世帯や三世帯世帯より幸福度が低い傾向が見られ、特に世帯収入が500万円未満の層で幸福度の差が大きくなっています。

世帯収入が100万円から500万円未満の二世帯世帯は、100万円から500万円未満の一世代世帯より、「自由な時間」や「精神的なゆとり」、「必要な収入」がなく、「余暇は充実」していないと感じています。なお、100万円から500万円未満の二世帯世帯と三世帯世帯とは暮らしの実感に大きな差は見られません。

第2章 幸福実感指標の現状

分析の考え方

「みえ県民力ビジョン」において設定した16の幸福実感指標に基づき質問した「地域や社会の状況についての実感」について、県民の皆さんがどの程度実感しているのか、問2の回答結果をもとに7つの属性(性、年代、職業、結婚、世帯構成、世帯収入、地域)ごとにクロス集計による分析を行いました。

特に、実感していない割合が高い属性項目は何かを把握することは、県民の幸福実感の向上に向けて、県が注力していくべき課題を考える際に一つの手掛かりになるのではと考えます。

(分析の進め方)

16の幸福実感指標毎に、以下の通り分析を行いました。

- (1) まず、県民の皆さんがどのくらい実感しているのかを確認するため、県全体のそれぞれの回答割合を図示しました。【図表】
- (2) 次に、実感していない層はどの人たちかを見るため、「どちらかといえば感じない」と「感じない」について、属性ごとに、属性全体とそれぞれの属性項目の回答割合の差を図示しました。【図表】
(図表において、棒グラフが上向きの場合、その属性項目は「どちらかといえば感じない」もしくは「感じない」と回答した割合が高いことを示しています。)
- (3) 実感している層と実感していない層を把握するため、属性全体との回答割合の差が統計的に有意であるといえる属性項目を、回答別に表示しています。(図表)
- (4) 最後に、属性全体とそれぞれの属性項目の回答割合の差が大きい属性項目(例:「どちらかといえば感じない」「感じない」の回答割合がいずれも属性全体より高い属性項目)を、特徴のある属性項目であると捉え、要点として記述しています。

(注1) 統計的な手法の詳細については資料編8頁に、分析の進め方の具体例については資料編9頁に掲載しています。

(注2) 幸福実感指標は、「みえ県民力ビジョン行動指針」において、16の政策分野ごとに設定したもので、県民の皆さん一人ひとりが生活している中で感じる政策分野ごとの実感の推移を調べ、全体としての幸福実感を把握するための指標です。

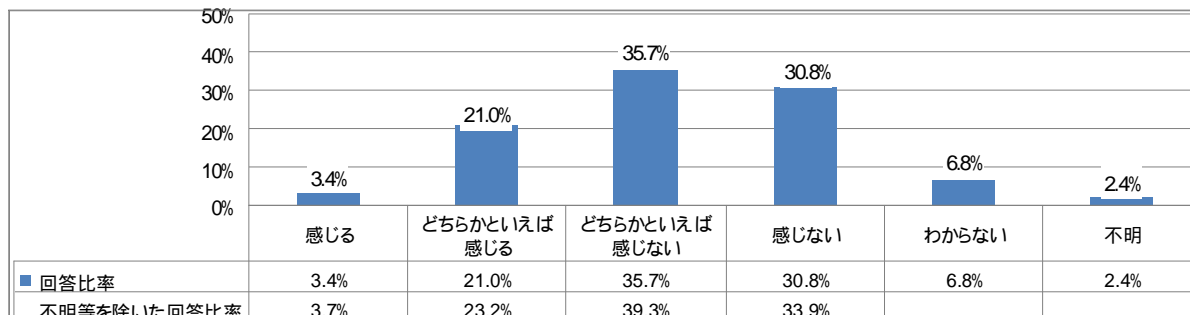
問2	幸福実感指標	関連する政策分野
2-1	災害等の危機への備えが進んでいると感じる県民の割合	危機管理
2-2	必要な医療サービスが利用できていると感じる県民の割合	命を守る
2-3	犯罪や事故が少なく、安全に暮らせていると感じる県民の割合	暮らしを守る
2-4	必要な福祉サービスが利用できていると感じる県民の割合	共生の福祉社会
2-5	身近な自然や環境を守る取組が広がっていると感じる県民の割合	環境を守る持続可能な社会
2-6	一人ひとりが尊重され、誰もが社会に参画できていると感じる県民の割合	人権の尊重と多様性を認め合う社会
2-7	子どものためになる教育が行われていると感じる県民の割合	教育の充実
2-8	地域社会の見守りの中で、子どもが元気に育っていると感じる県民の割合	子どもと育ちと子育て
2-9	スポーツを通じて夢や感動が育まれていると感じる県民の割合	スポーツの推進
2-10	自分の住んでいる地域に愛着があり、今後も住み続けたいと感じる県民の割合	地域との連携
2-11	文化芸術や地域の歴史等について学び親しむことができると感じる県民の割合	文化と学び
2-12	三重県産の農林水産物を買いたいと感じる県民の割合	農林水産業
2-13	県内の産業活動が活発であると感じる県民の割合	強んで多様な産業
2-14	働きたい人が仕事に就き、必要な収入を得ていると感じる県民の割合	雇用の確保
2-15	国内外に三重県の魅力が発信され交流が進んでいると感じる県民の割合	世界に開かれた三重
2-16	道路や公共交通機関等が整っていると感じる県民の割合	安心と活力を生み出す基盤

分析結果

(1) 災害等の危機への備えが進んでいる (問2 - 1)

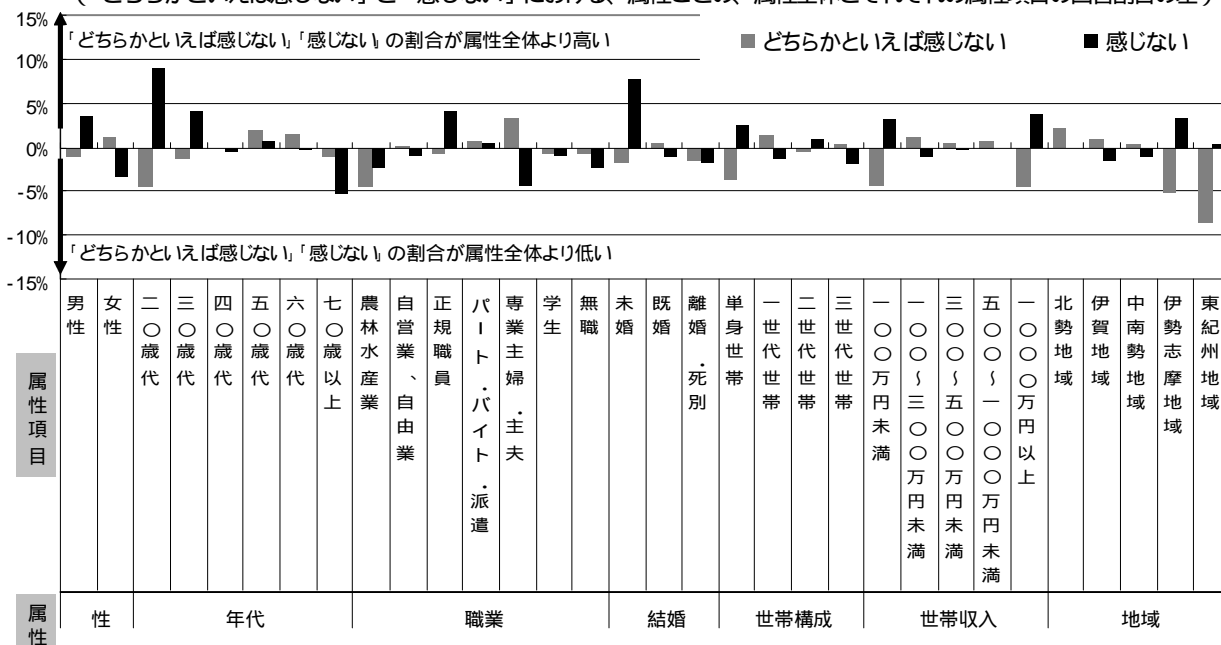
図表 : 県民の皆さんがどのくらい実感しているか

(問2 - 1におけるそれぞれの回答の割合。「不明」及び「わからない」の回答を除いた場合の回答割合も並記)



図表 : 実感していない層はどの人たちが

(「どちらかといえば感じない」と「感じない」における、属性ごとの、属性全体とそれぞれの属性項目の回答割合の差)



図表 : 実感している層と実感していない層(属性全体と各属性項目の回答割合の差のうち、統計的に有意な差がある属性項目)

	属性全体より回答割合が高い	属性全体より回答割合が低い
感じる		
どちらかといえば感じる		未婚
どちらかといえば感じない		
感じない	男性、20歳代、正規職員、未婚	女性、70歳以上

【要点】

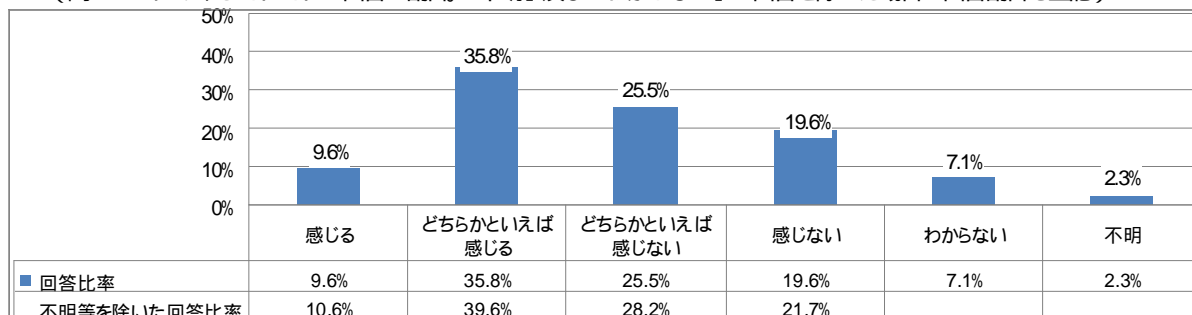
災害等の危機への備えが進んでいるかどうかの実感については、「感じる」と「どちらかといえば感じる」を合計した「実感している層」の割合は24.4%、「どちらかといえば感じない」と「感じない」を合計した「実感していない層」の割合は66.5%となっており、「実感していない層」が「実感している層」の倍以上を占めています。

特に「男性」は「女性」よりも「実感していない層」が多くなっています。また、「未婚」や「20歳代」においては「実感していない層」が多い一方、「70歳以上」や「農林水産業」、「東紀州地域」などにおいては「実感していない層」が少ない傾向にあります。

(2) 必要な医療サービスが利用できている(問2-2)

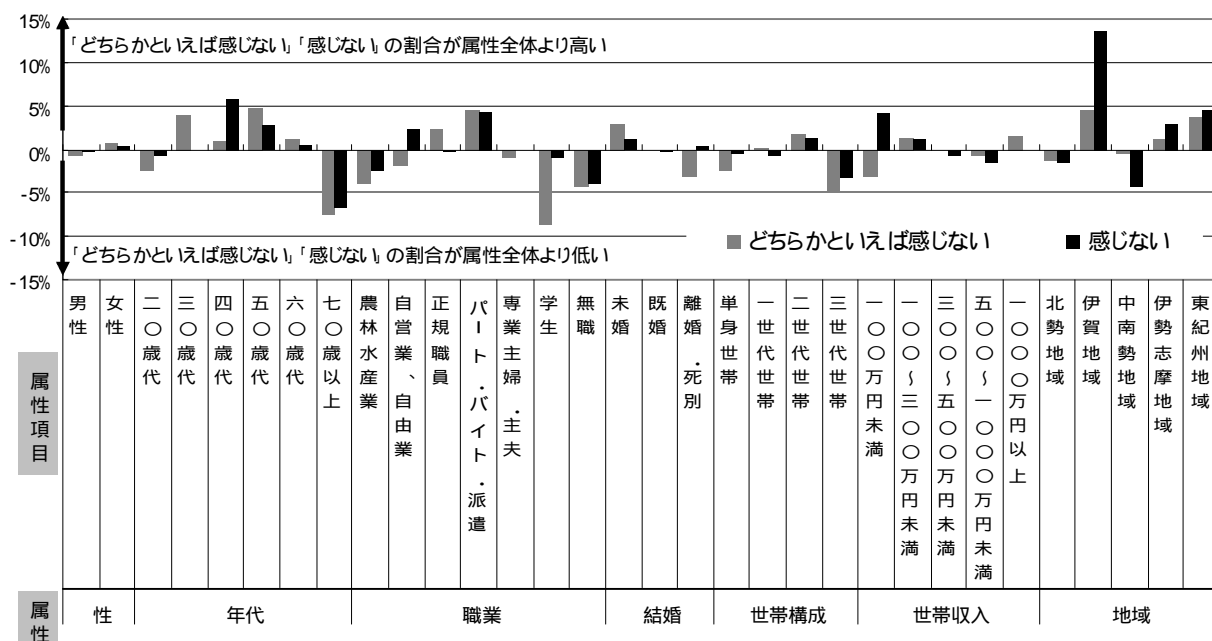
図表 : 県民の皆さんがどのくらい実感しているか

(問2-2におけるそれぞれの回答の割合。「不明」及び「わからない」の回答を除いた場合の回答割合も並記)



図表 : 実感していない層はどの人たちか

(「どちらかといえば感じない」と「感じない」における、属性ごとの、属性全体とそれぞれの属性項目の回答割合の差)



図表 : 実感している層と実感していない層(属性全体と各属性項目の回答割合の差のうち、統計的に有意な差がある属性項目)

	属性全体より回答割合が高い	属性全体より回答割合が低い
感じる	70歳以上、無職	
どちらかといえば感じる	三世帯世帯、500～1000万円未満、中勢地域	伊賀地域
どちらかといえば感じない		70歳以上
感じない	40歳代、伊賀地域	70歳以上

【要点】

必要な医療サービスが利用できているかどうかの実感については、「感じる」と「どちらかといえば感じる」を合計した「実感している層」の割合は45.4%、「どちらかといえば感じない」と「感じない」を合計した「実感していない層」の割合は45.0%となっており、「実感していない層」と「実感している層」はほぼ同じ割合となっています。

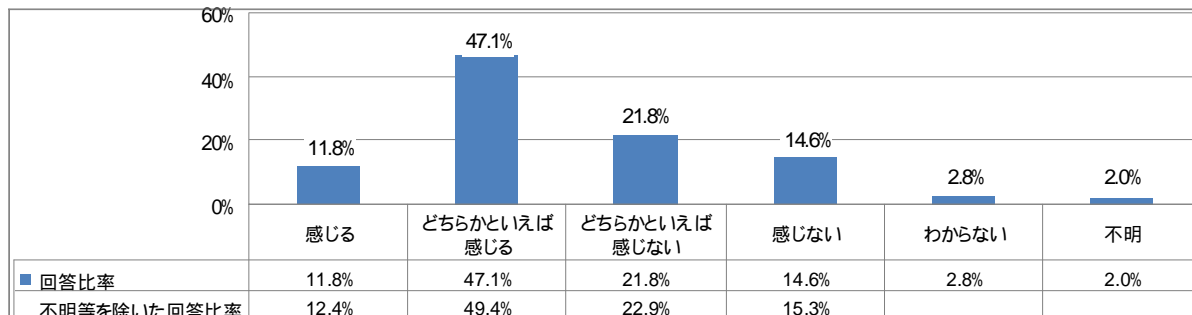
その中では、“伊賀地域”において「実感していない層」が多いことが非常に顕著になっています。

一方、“70歳以上”においては「実感していない層」が少なくなっています。

(3) 犯罪や事故が少なく、安全に暮らせている(問2-3)

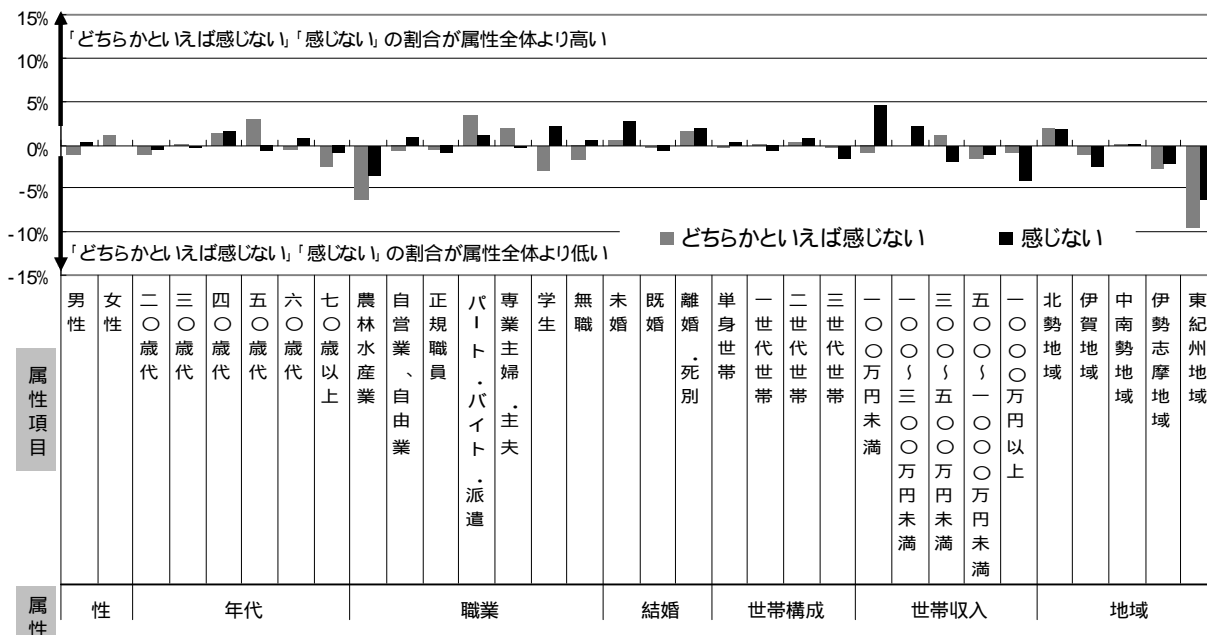
図表 : 県民の皆さんがどのくらい実感しているか

(問2-3におけるそれぞれの回答の割合。「不明」及び「わからない」の回答を除いた場合の回答割合も並記)



図表 : 実感していない層はどの人たちが

(「どちらかといえば感じない」と「感じない」における、属性ごとの、属性全体とそれぞれの属性項目の回答割合の差)



図表 : 実感している層と実感していない層(属性全体と各属性項目の回答割合の差のうち、統計的に有意な差がある属性項目)

	属性全体より回答割合が高い	属性全体より回答割合が低い
感じる	東紀州地域	
どちらかといえば感じる	500～1000万円未満、1000万円以上	離婚・死別、100万円未満
どちらかといえば感じない		
感じない		

【要点】

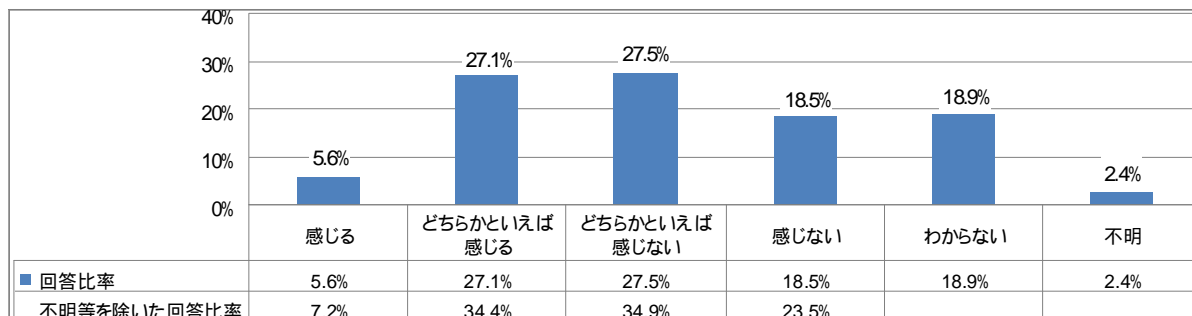
犯罪や事故が少なく、安全に暮らせているかどうかの実感については、「感じる」と「どちらかといえば感じる」を合計した「実感している層」の割合は58.9%、「どちらかといえば感じない」と「感じない」を合計した「実感している層」の割合は36.4%となっており、「実感している層」が「実感していない層」を大きく上回っています。

特に、「農林水産業」と「東紀州地域」では「実感していない層」が少ない傾向にあります。

(4) 必要な福祉サービスが利用できている(問2-4)

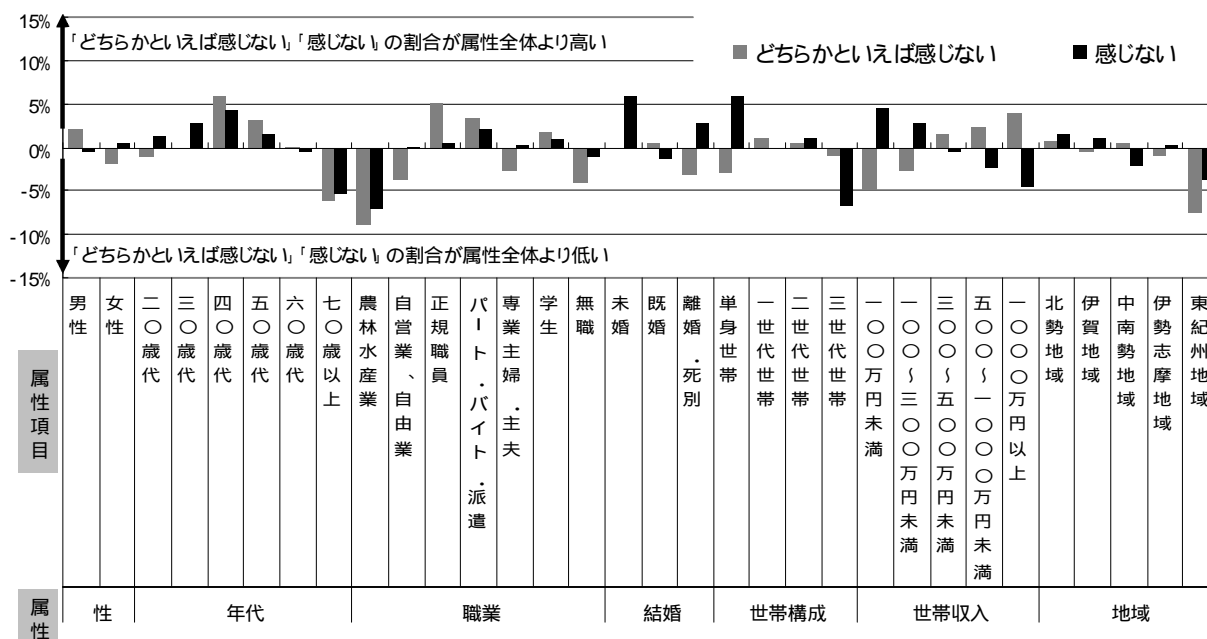
図表 : 県民の皆さんがどのくらい実感しているか

(問2-4におけるそれぞれの回答の割合。「不明」及び「わからない」の回答を除いた場合の回答割合も並記)



図表 : 実感していない層はどの人たちが

(「どちらかといえば感じない」と「感じない」における、属性ごとの、属性全体とそれぞれの属性項目の回答割合の差)



図表 : 実感している層と実感していない層(属性全体と各属性項目の回答割合の差のうち、統計的に有意な差がある属性項目)

	属性全体より回答割合が高い	属性全体より回答割合が低い
感じる	70歳以上	
どちらかといえば感じる	70歳以上、農林水産業	
どちらかといえば感じない	40歳代、正規職員	70歳以上
感じない		70歳以上、三世帯世帯

【要点】

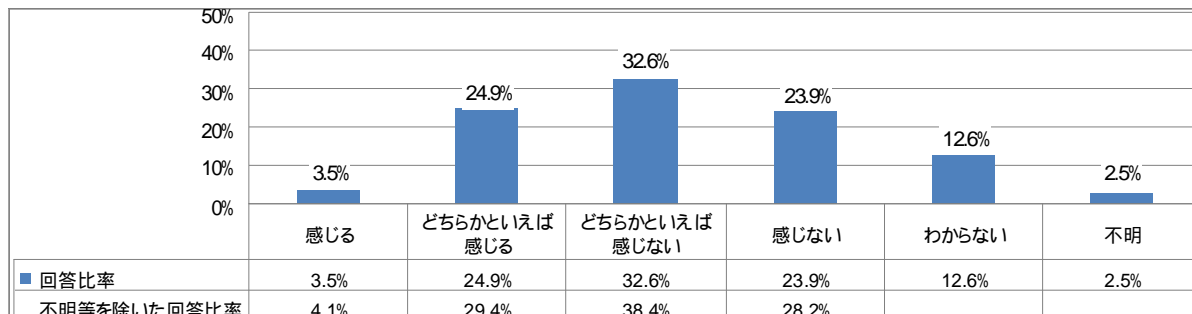
必要な福祉サービスが利用できているかどうかの実感については、「感じる」と「どちらかといえば感じる」を合計した「実感している層」の割合は32.7%、「どちらかといえば感じない」と「感じない」を合計した「実感していない層」の割合は46.0%となっており、「実感していない層」が「実感している層」を上回っています。

特に、“40歳代”や“正規職員”、“未婚”において「実感していない層」が多く、“70歳以上”や“農林水産業”、“三世帯世帯”、“東紀州地域”において「実感していない層」は少ない傾向にあります。

(5) 身近な自然や環境を守る取組が広がっている (問2 - 5)

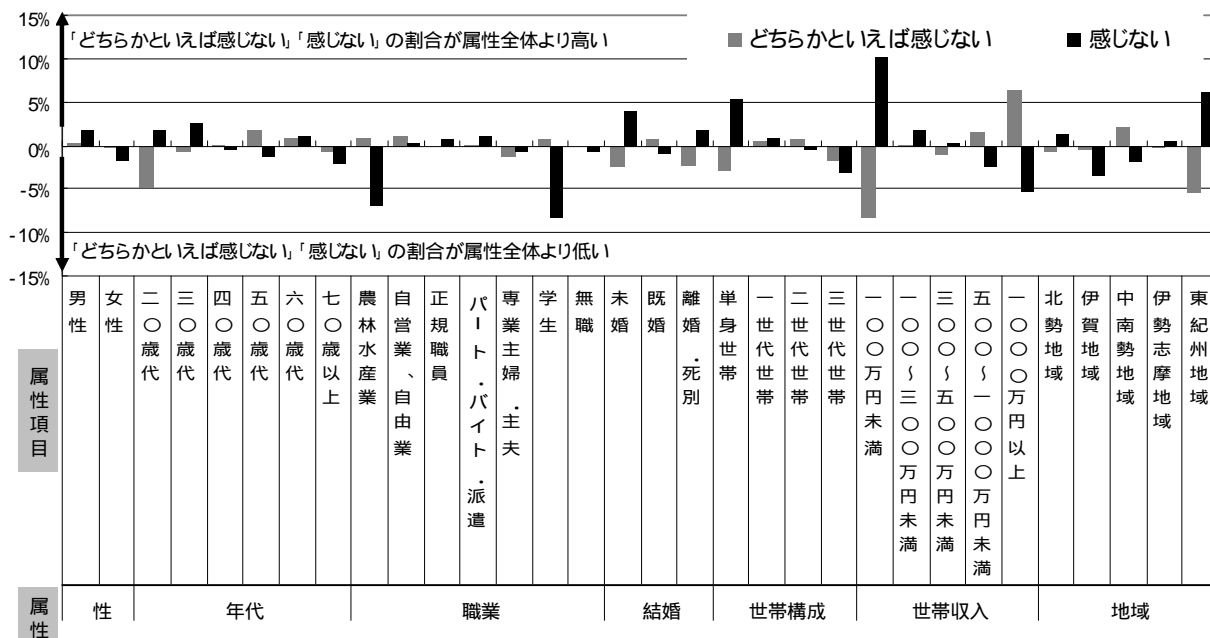
図表 : 県民の皆さんがどのくらい実感しているか

(問2 - 5におけるそれぞれの回答の割合。「不明」及び「わからない」の回答を除いた場合の回答割合も並記)



図表 : 実感していない層はどの人たちが

(「どちらかといえば感じない」と「感じない」における、属性ごとの、属性全体とそれぞれの属性項目の回答割合の差)



図表 : 実感している層と実感していない層 (属性全体と各属性項目の回答割合の差のうち、統計的に有意な差がある属性項目)

	属性全体より回答割合が高い	属性全体より回答割合が低い
感じる		
どちらかといえば感じる		
どちらかといえば感じない		
感じない	100万円未満	

【要点】

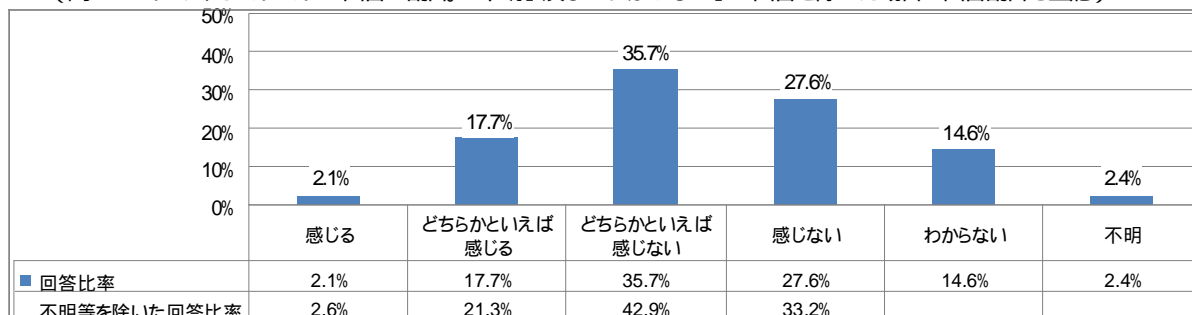
身近な自然や環境を守る取組が広がっているかどうかの実感については、「感じる」と「どちらかといえば感じる」を合計した「実感している層」の割合は28.4%、「どちらかといえば感じない」と「感じない」を合計した「実感していない層」の割合は56.5%となっており、「実感していない層」が「実感している層」のほぼ倍となっています。

その中で、“農林水産業”と“学生”は「実感していない層」が少ない傾向にあります。

(6) 一人ひとりが尊重され、誰もが社会に参画できている(問2-6)

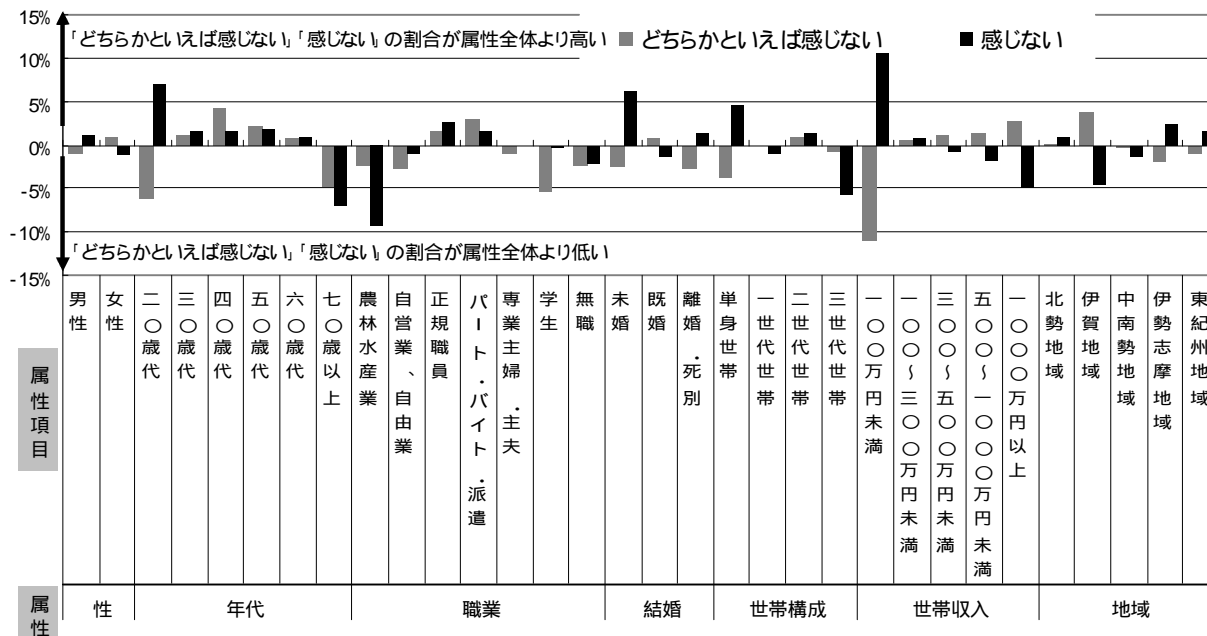
図表 : 県民の皆さんがどのくらい実感しているか

(問2-6におけるそれぞれの回答の割合。「不明」及び「わからない」の回答を除いた場合の回答割合も並記)



図表 : 実感していない層はどの人たちか

(「どちらかといえば感じない」と「感じない」における、属性ごとの、属性全体とそれぞれの属性項目の回答割合の差)



図表 : 実感している層と実感していない層(属性全体と各属性項目の回答割合の差のうち、統計的に有意な差がある属性項目)

	属性全体より回答割合が高い	属性全体より回答割合が低い
感じる		
どちらかといえば感じる	70歳以上	
どちらかといえば感じない		70歳以上、100万円未満
感じない	未婚、100万円未満	70歳以上、三世帯世帯

【要点】

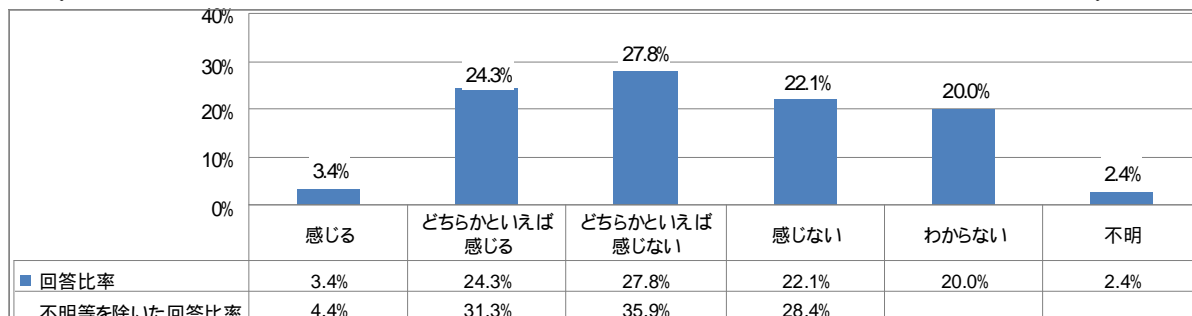
一人ひとりが尊重され、誰もが社会に参画できているかどうかの実感については、「感じる」と「どちらかといえば感じる」を合計した「実感している層」の割合は19.8%、「どちらかといえば感じない」と「感じない」を合計した割合は63.3%となっており、「実感していない層」が「実感している層」を大きく上回っています。

その中では、“70歳以上”と“農林水産業”においては、「実感していない層」が少ない傾向にあります

(7) 子どものためになる教育が行われている(問2-7)

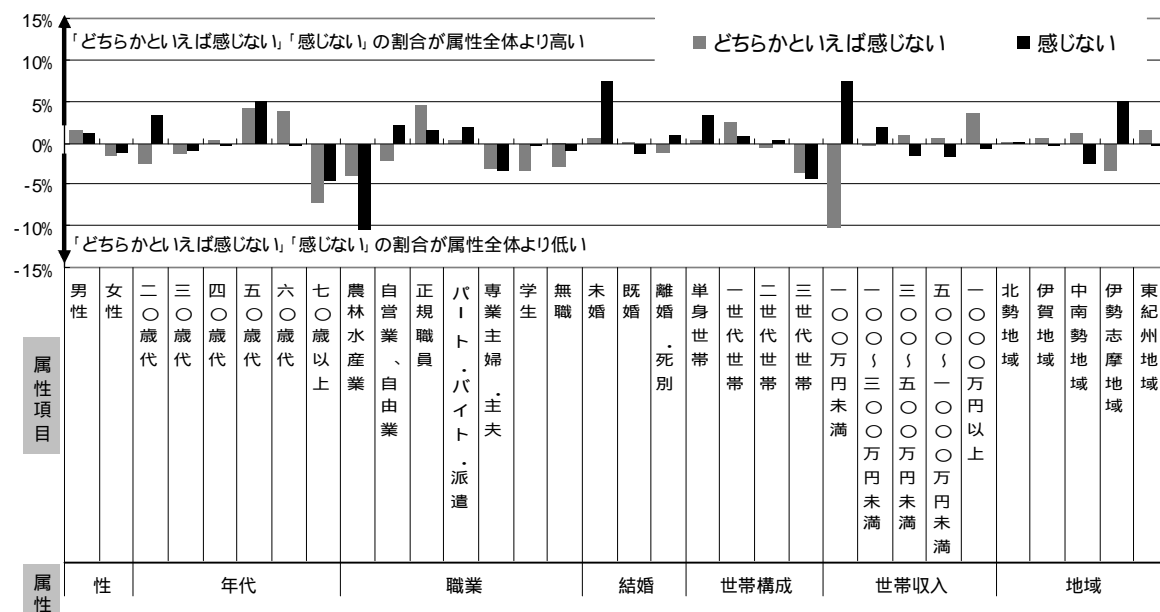
図表 : 県民の皆さんがどのくらい実感しているか

(問2-7におけるそれぞれの回答の割合。「不明」及び「わからない」の回答を除いた場合の回答割合も並記)



図表 : 実感していない層はどの人たちか

(「どちらかといえば感じない」と「感じない」における、属性ごとの、属性全体とそれぞれの属性項目の回答割合の差)



図表 : 実感している層と実感していない層(属性全体と各属性項目の回答割合の差のうち、統計的に有意な差がある属性項目)

	属性全体より回答割合が高い	属性全体より回答割合が低い
感じる		
どちらかといえば感じる	70歳以上、農林水産業、三世代世帯	50歳代、正規職員、未婚
どちらかといえば感じない	正規職員	70歳以上、100万円未満
感じない	未婚	

【要点】

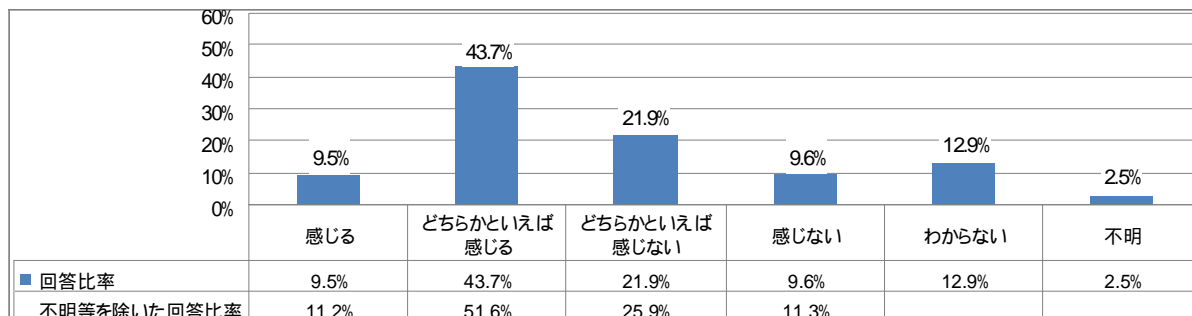
子どものためになる教育が行われているかどうかの実感については、「感じる」と「どちらかといえば感じる」を合計した「実感している層」の割合は27.7%、「どちらかといえば感じない」と「感じない」を合計した「実感していない層」の割合は49.9%となっており、「実感していない層」が「実感している層」を大きく上回っています。

特に、「50歳代」や「未婚」、「正規職員」で「実感していない層」が多い一方、「70歳以上」や「三世代世帯」においては「実感していない層」が少ない傾向にあります。

(8) 地域社会の見守りの中で、子どもが元気に育っている(問2-8)

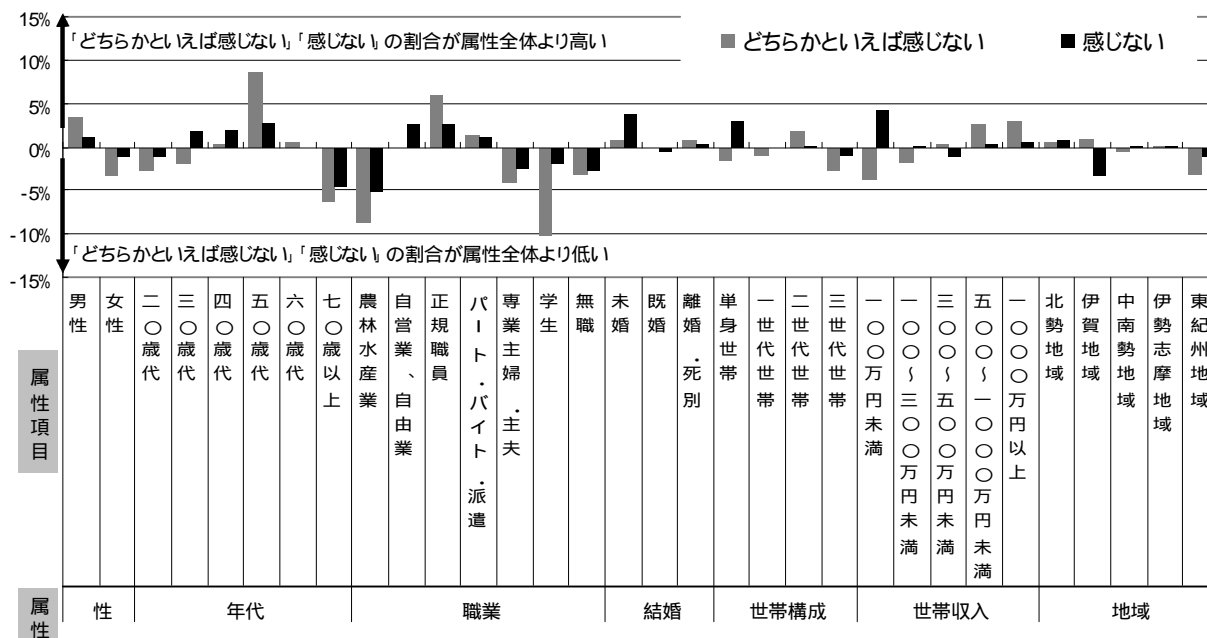
図表 : 県民の皆さんがどのくらい実感しているか

(問2-8におけるそれぞれの回答の割合。「不明」及び「わからない」の回答を除いた場合の回答割合も並記)



図表 : 実感していない層はどのような人たちか

(「どちらかといえば感じない」と「感じない」における、属性ごとの、属性全体とそれぞれの属性項目の回答割合の差)



図表 : 実感している層と実感していない層(属性全体と各属性項目の回答割合の差のうち、統計的に有意な差がある属性項目)

	属性全体より回答割合が高い	属性全体より回答割合が低い
感じる	70歳以上、農林水産業	
どちらかといえば感じる	女性	50歳代、正規職員
どちらかといえば感じない	50歳代、正規職員	70歳以上
感じない		

【要点】

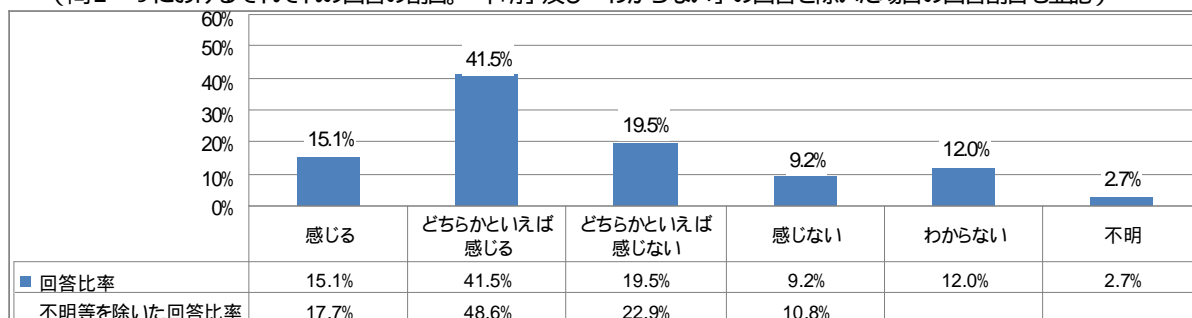
地域社会の見守りの中で、子どもが元気に育っているかどうかの実感については、「感じる」と「どちらかといえば感じる」を合計した「実感している層」の割合は53.2%、「どちらかといえば感じない」と「感じない」を合計した「実感していない層」の割合は31.5%となっており、「実感している層」が「実感していない層」を大きく上回っています。

特に、“70歳以上”、“農林水産業”において「実感していない層」が少ない一方、“50歳代”、“正規職員”においては「実感していない層」が多い傾向にあります。

(9) スポーツを通じて夢や感動が育まれている(問2-9)

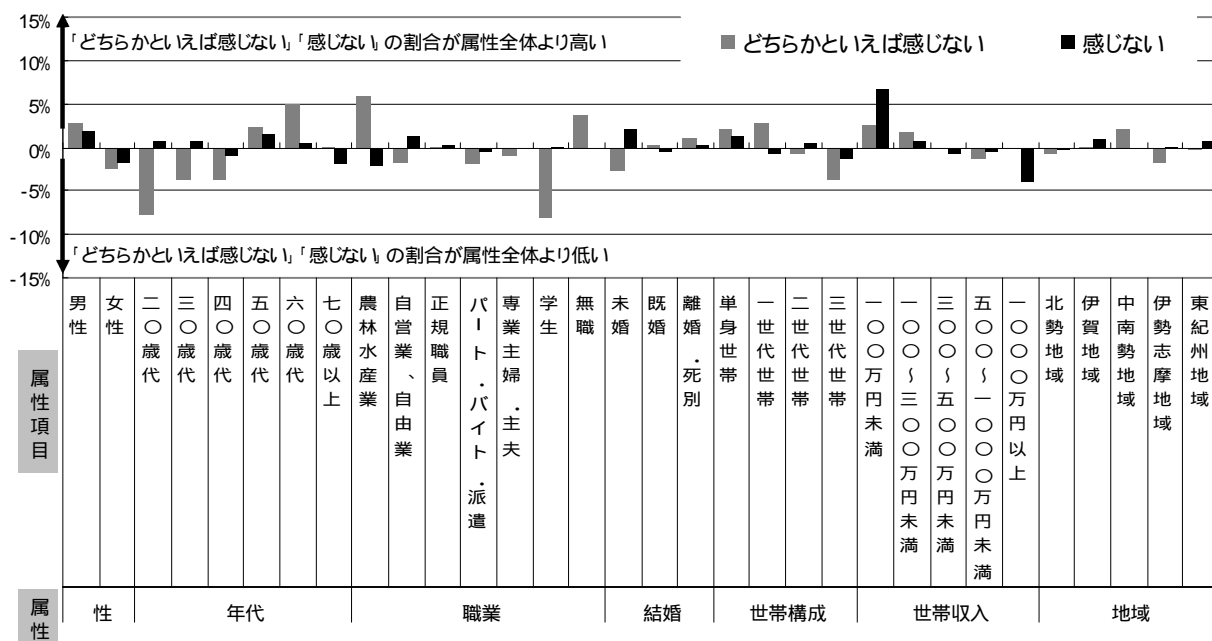
図表 : 県民の皆さんがどのくらい実感しているか

(問2-9におけるそれぞれの回答の割合。「不明」及び「わからない」の回答を除いた場合の回答割合も並記)



図表 : 実感していない層はどの人たちか

(「どちらかといえば感じない」と「感じない」における、属性ごとの、属性全体とそれぞれの属性項目の回答割合の差)



図表 : 実感している層と実感していない層(属性全体と各属性項目の回答割合の差のうち、統計的に有意な差がある属性項目)

	属性全体より回答割合が高い	属性全体より回答割合が低い
感じる	20歳代、30歳代	60歳代
どちらかといえば感じる		20歳代、未婚、100万円未満
どちらかといえば感じない	60歳代	
感じない		

【要点】

スポーツを通じて夢や感動が育まれているかどうかの実感については、「感じる」と「どちらかといえば感じる」を合計した「実感している層」の割合は56.6%、「どちらかといえば感じない」と「感じない」を合計した「実感していない層」の割合は28.7%となっており、「実感している層」が「実感していない層」のほぼ倍となっています。

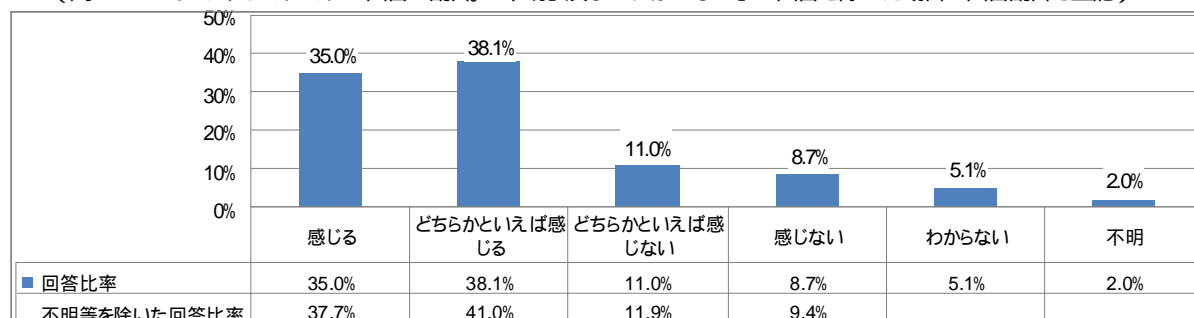
特に、“20歳代”、“30歳代”の若年者において「実感している層」が多くなっています。

また、世帯収入が“100万円未満”において「実感していない層」が多く、世帯収入が高くなる程、「実感している層」が多くなる傾向があります。

(10) 自分の住んでいる地域に愛着があり、今後も住み続けたい(問2-10)

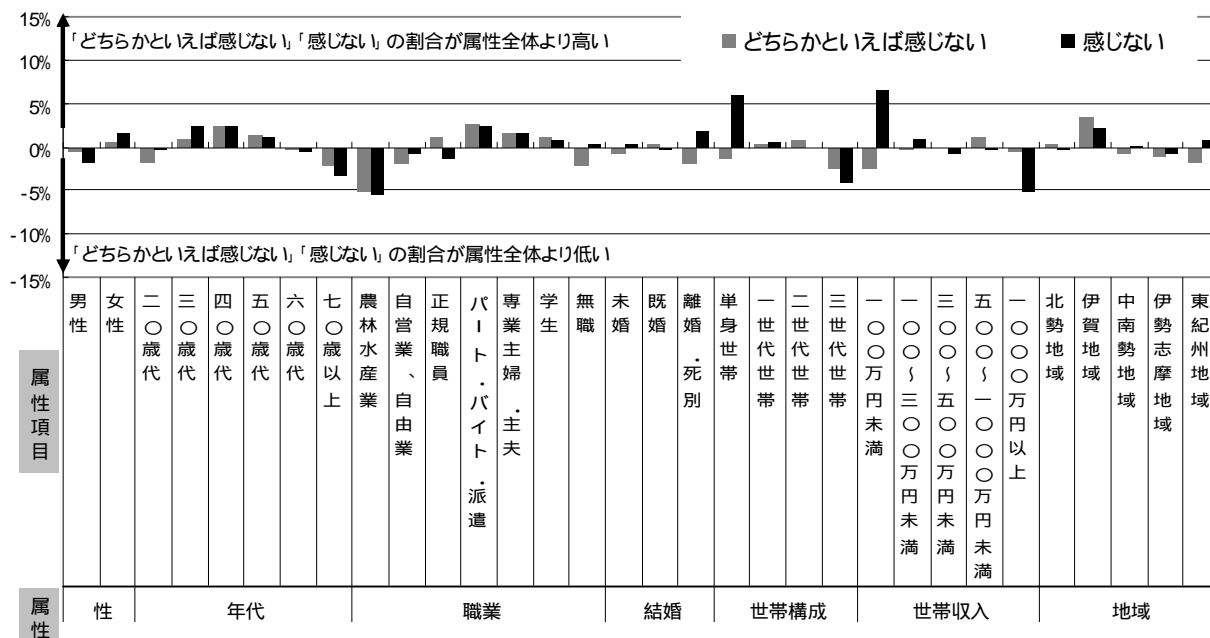
図表 : 県民の皆さんがどのくらい実感しているか

(問2-10におけるそれぞれの回答の割合。「不明」及び「わからない」の回答を除いた場合の回答割合も並記)



図表 : 実感していない層はどの人たちか

(「どちらかといえば感じない」と「感じない」における、属性ごとの、属性全体とそれぞれの属性項目の回答割合の差)



図表 : 実感している層と実感していない層(属性全体と各属性項目の回答割合の差のうち、統計的に有意な差がある属性項目)

	属性全体より回答割合が高い	属性全体より回答割合が低い
感じる	70歳以上、農林水産業、無職、三世帯世帯、100万円未満	40歳代、50歳代、パート・バイト・派遣、伊賀地域
どちらかといえば感じる	40歳代、1000万円以上	70歳以上、無職、100万円未満
どちらかといえば感じない		
感じない		

【要点】

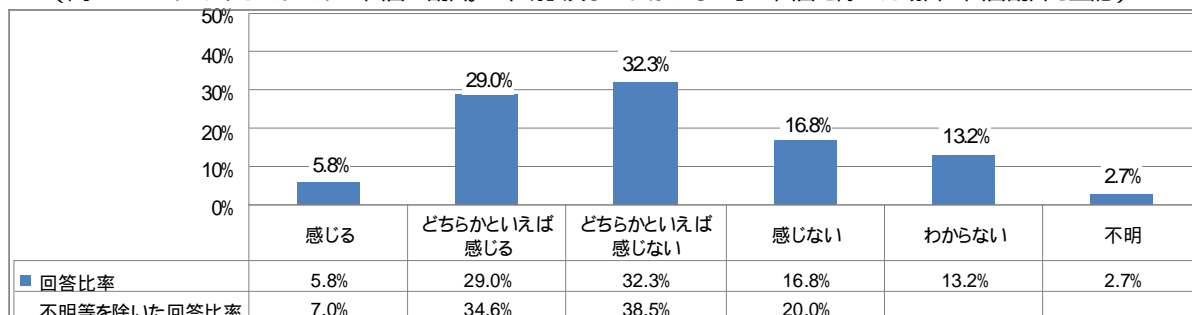
自分の住んでいる地域に愛着があり、今後も住み続けたいについては、「感じる」と「どちらかといえば感じる」を合計した「実感している層」の割合は73.1%、「どちらかといえば感じない」と「感じない」を合計した「実感していない層」の割合は19.7%となっており、「実感している層」が「実感していない層」を大きく上回っています。

その中では、“パート・バイト・派遣”や“単身世帯”、“100万円未満”、“伊賀地域”において「実感していない層」が多く、“農林水産業”や“1000万円以上”は「実感していない層」が少ない傾向にあります。

(11) 文化芸術や地域の歴史等について、学び親しむことができる(問2-11)

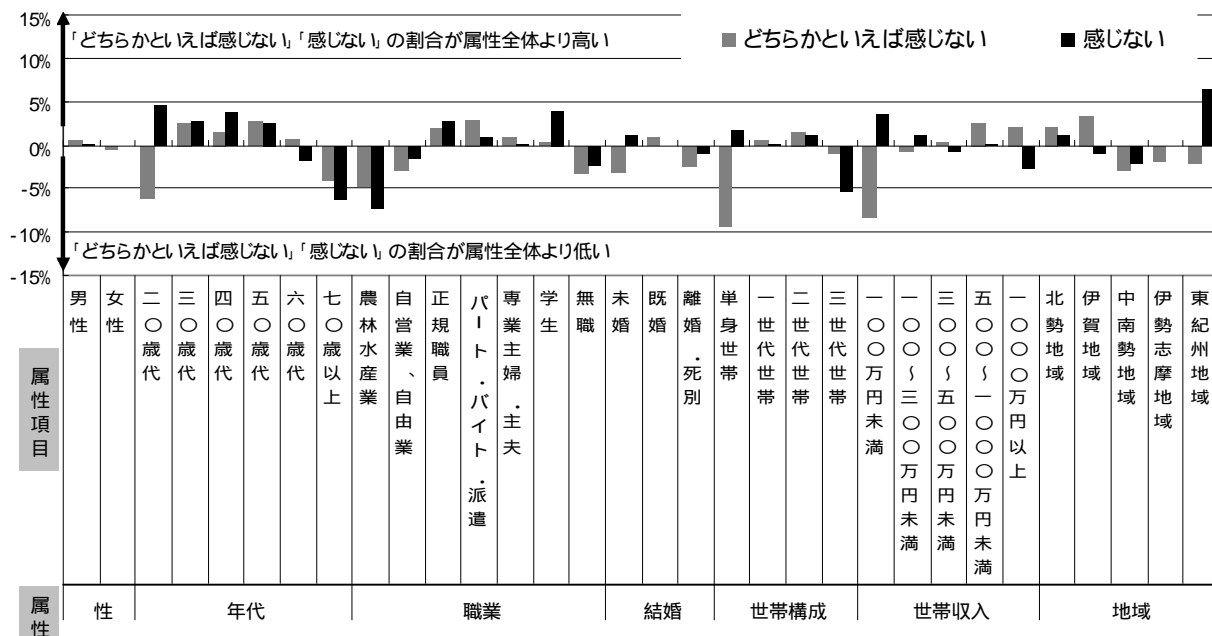
図表 : 県民の皆さんがどのくらい実感しているか

(問2-11におけるそれぞれの回答の割合。「不明」及び「わからない」の回答を除いた場合の回答割合も並記)



図表 : 実感していない層はどの人たちか

(「どちらかといえば感じない」と「感じない」における、属性ごとの、属性全体とそれぞれの属性項目の回答割合の差)



図表 : 実感している層と実感していない層(属性全体と各属性項目の回答割合の差のうち、統計的に有意な差がある属性項目)

	属性全体より回答割合が高い	属性全体より回答割合が低い
感じる		
どちらかといえば感じる	70歳以上	
どちらかといえば感じない		単身世帯
感じない		70歳以上

【要点】

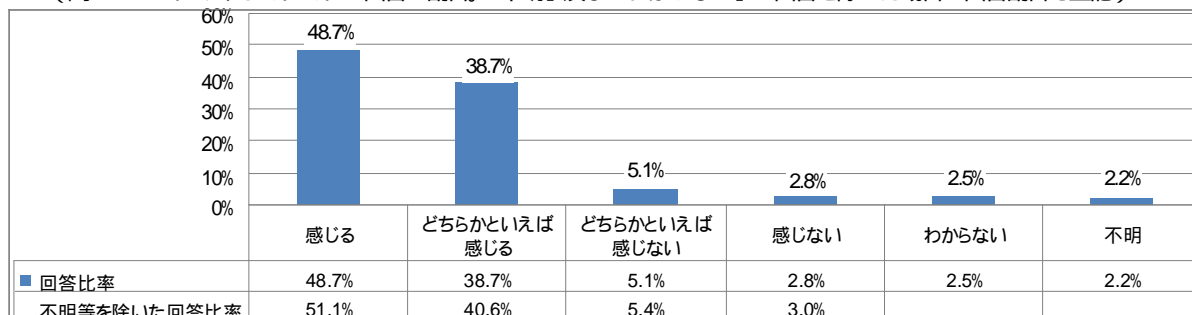
文化芸術や地域の歴史等について、学び親しむことができるかどうかの実感については、「感じる」と「どちらかといえば感じる」を合計した「実感している層」の割合は34.8%、「どちらかといえば感じない」と「感じない」を合計した「実感していない層」の割合は49.1%となっており、「実感していない層」が「実感している層」を上回っています。

その中では、年代が上がるほど実感している人が増える傾向が見られるほか、“単身世帯”においては「実感していない層」が少なくなっています。また、“東紀州地域”において、「実感していない層」が多い傾向が見られます。

(12) 三重県産の農林水産物を買いたい(問2-12)

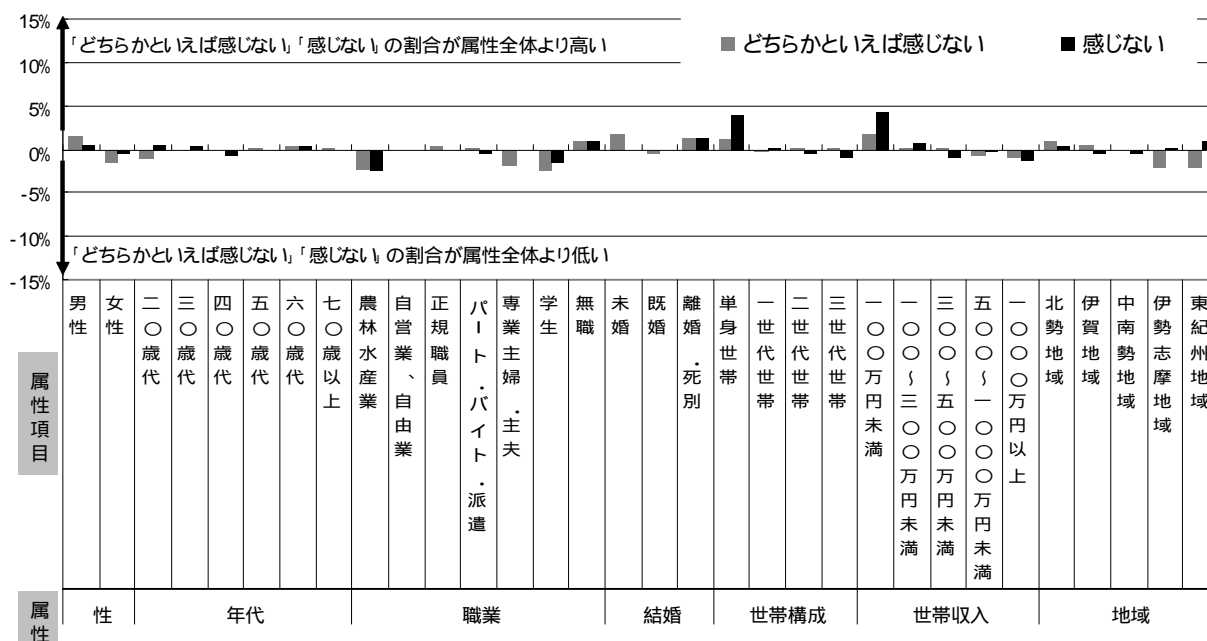
図表 : 県民の皆さんがどのくらい実感しているか

(問2-12におけるそれぞれの回答の割合。「不明」及び「わからない」の回答を除いた場合の回答割合も並記)



図表 : 実感していない層はどの人たちか

(「どちらかといえば感じない」と「感じない」における、属性ごとの、属性全体とそれぞれの属性項目の回答割合の差)



図表 : 実感している層と実感していない層(属性全体と各属性項目の回答割合の差のうち、統計的に有意な差がある属性項目)

	属性全体より回答割合が高い	属性全体より回答割合が低い
感じる	女性、専業主婦・主夫、伊勢志摩地域、東紀州地域	男性、北勢地域、伊賀地域
どちらかといえば感じる	男性、伊賀地域	女性、専業主婦・主夫、伊勢志摩地域
どちらかといえば感じない		
感じない		

【要点】

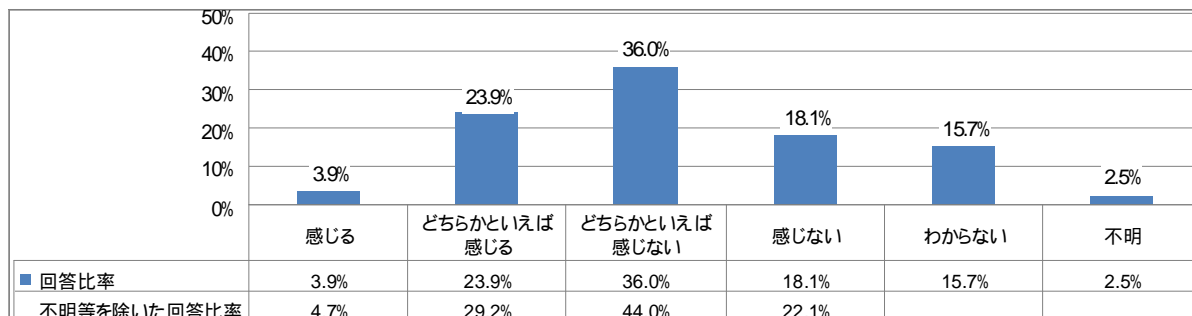
三重県産の農林水産物を買いたいかどうかの実感については、「感じる」と「どちらかといえば感じる」を合計した「実感している層」の割合は87.4%、「どちらかといえば感じない」と「感じない」を合計した「実感していない層」の割合は7.9%となっており、ほとんどの人が実感しています。

世帯収入が増えるほど「実感している層」が増える傾向が見られるほか、“単身世帯”においては「実感していない層」が多い傾向にあります。また、“農林水産業”や“東紀州地域”、“伊勢志摩地域”は「実感していない層」が少ない傾向にあります。

(13) 県内の産業活動が活発である(問2-13)

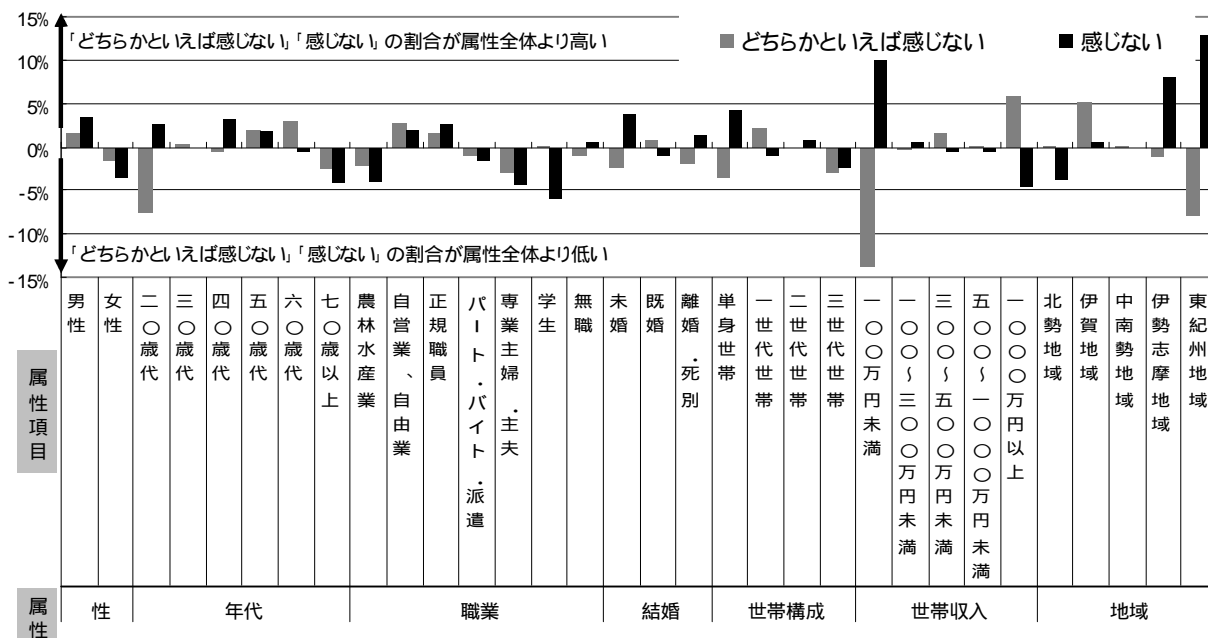
図表 : 県民の皆さんがどのくらい実感しているか

(問2-13におけるそれぞれの回答の割合。「不明」及び「わからない」の回答を除いた場合の回答割合も並記)



図表 : 実感していない層はどの人たちか

(「どちらかといえば感じない」と「感じない」における、属性ごとの、属性全体とそれぞれの属性項目の回答割合の差)



図表 : 実感している層と実感していない層(属性全体と各属性項目の回答割合の差のうち、統計的に有意な差がある属性項目)

	属性全体より回答割合が高い	属性全体より回答割合が低い
感じる		
どちらかといえば感じる	女性	男性
どちらかといえば感じない		100万円未満
感じない	100万円未満、伊勢志摩地域、東紀州地域	

【要点】

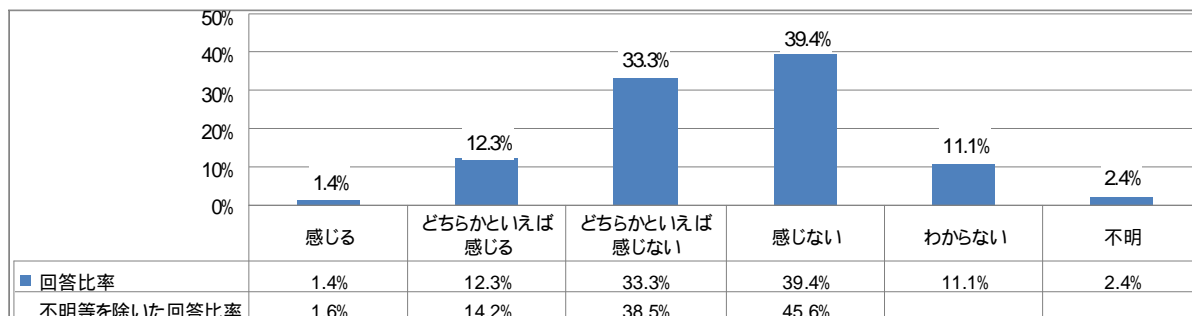
県内の産業活動が活発であるかどうかの実感については、「感じる」と「どちらかといえば感じる」を合計した「実感している層」の割合は27.8%、「どちらかといえば感じない」と「感じない」を合計した「実感していない層」の割合は54.1%となっており、「実感していない層」が「実感している層」のほぼ倍となっています。

特に、“東紀州地域”、“伊勢志摩地域”において「実感していない層」が多くなっています。また、“男性”のほうが、“女性”よりも「実感していない層」が多い傾向が見られます。

(14) 働きたい人が仕事に就き、必要な収入を得ている(問2-14)

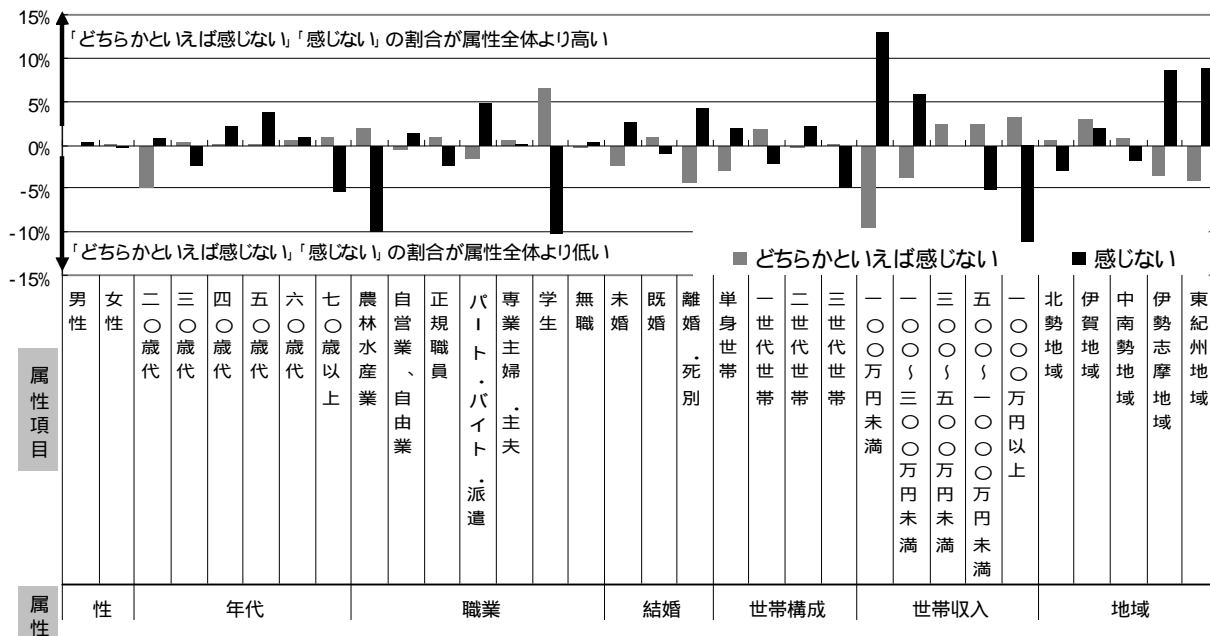
図表 : 県民の皆さんがどのくらい実感しているか

(問2-14におけるそれぞれの回答の割合。「不明」及び「わからない」の回答を除いた場合の回答割合も並記)



図表 : 実感していない層はどの人たちか

(「どちらかといえば感じない」と「感じない」における、属性ごとの、属性全体とそれぞれの属性項目の回答割合の差)



図表 : 実感している層と実感していない層(属性全体と各属性項目の回答割合の差のうち、統計的に有意な差がある属性項目)

	属性全体より回答割合が高い	属性全体より回答割合が低い
感じる		
どちらかといえば感じる	1000万円以上	
どちらかといえば感じない		100万円未満
感じない	パート・バイト・派遣、100万円未満、100～300万円未満、伊勢志摩地域、東紀州地域	70歳以上、農林水産業、500～1000万円未満、1000万円以上

【要点】

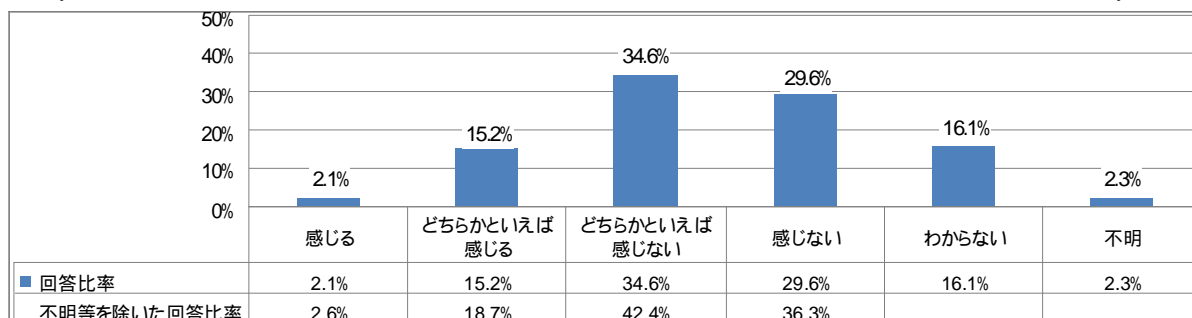
働きたい人が仕事に就き、必要な収入を得ているかどうかの実感については、「感じる」と「どちらかといえば感じる」を合計した「実感している層」の割合は13.7%、「どちらかといえば感じない」と「感じない」を合計した「実感していない層」の割合は72.7%となっており、「実感していない層」が「実感している層」よりも大きく上回っています。

特に、“東紀州地域”、“伊勢志摩地域”において「実感していない層」が多く、“農林水産業”においては少なくなっています。また、世帯収入が増える程、「実感している層」が増える傾向があります。

(15) 国内外に三重県の魅力が発信され、交流が進んでいる(問2-15)

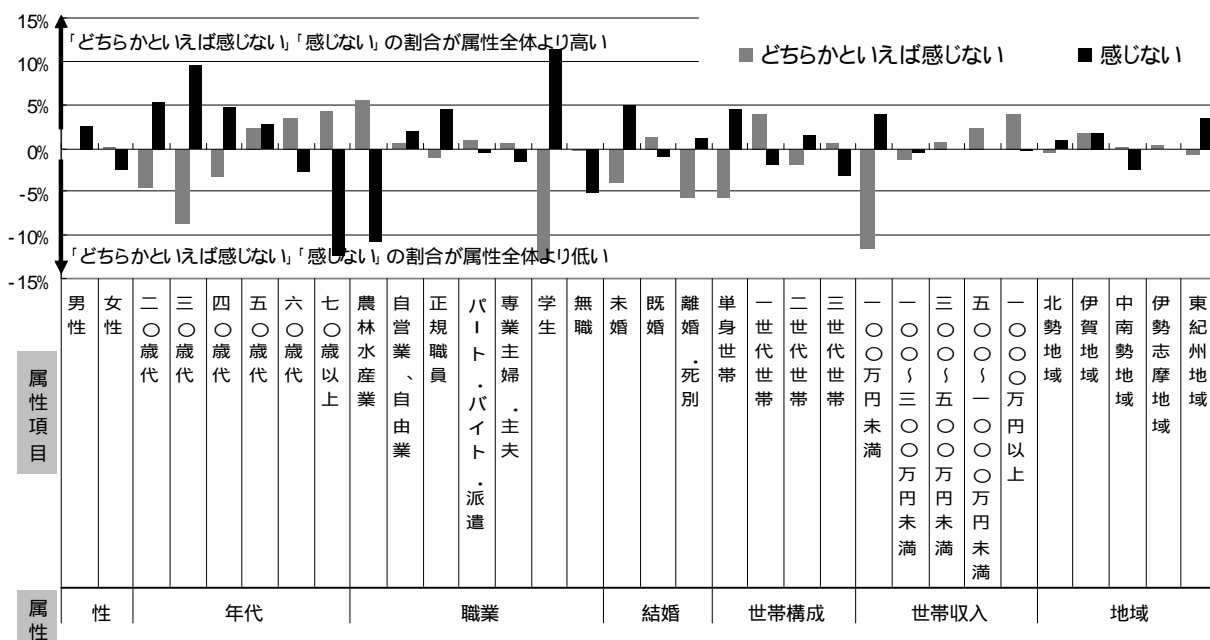
図表 : 県民の皆さんがどのくらい実感しているか

(問2-15におけるそれぞれの回答の割合。「不明」及び「わからない」の回答を除いた場合の回答割合も並記)



図表 : 実感していない層はどの人たちか

(「どちらかといえば感じない」と「感じない」における、属性ごとの、属性全体とそれぞれの属性項目の回答割合の差)



図表 : 実感している層と実感していない層(属性全体と各属性項目の回答割合の差のうち、統計的に有意な差がある属性項目)

	属性全体より回答割合が高い	属性全体より回答割合が低い
感じる		
どちらかといえば感じる	70歳以上	
どちらかといえば感じない	一世帯世帯	30歳代、100万円未満
感じない	30歳代、正規職員	70歳以上、農林水産業、無職

【要点】

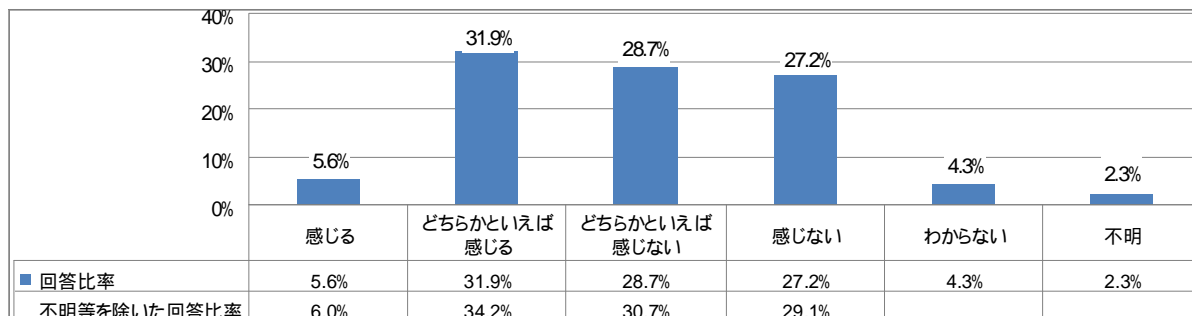
国内外に三重県の魅力が発信され、交流が進んでいるかどうかの実感については、「感じる」と「どちらかといえば感じる」を合計した「実感している層」の割合は17.3%、「どちらかといえば感じない」と「感じない」を合計した「実感していない層」の割合は64.2%となっており、「実感していない層」が圧倒的に多くなっています。

その中では、“70歳以上”、“農林水産業”において「実感していない層」が少なくなっています。

(16) 道路や公共交通機関等が整っている(問2-16)

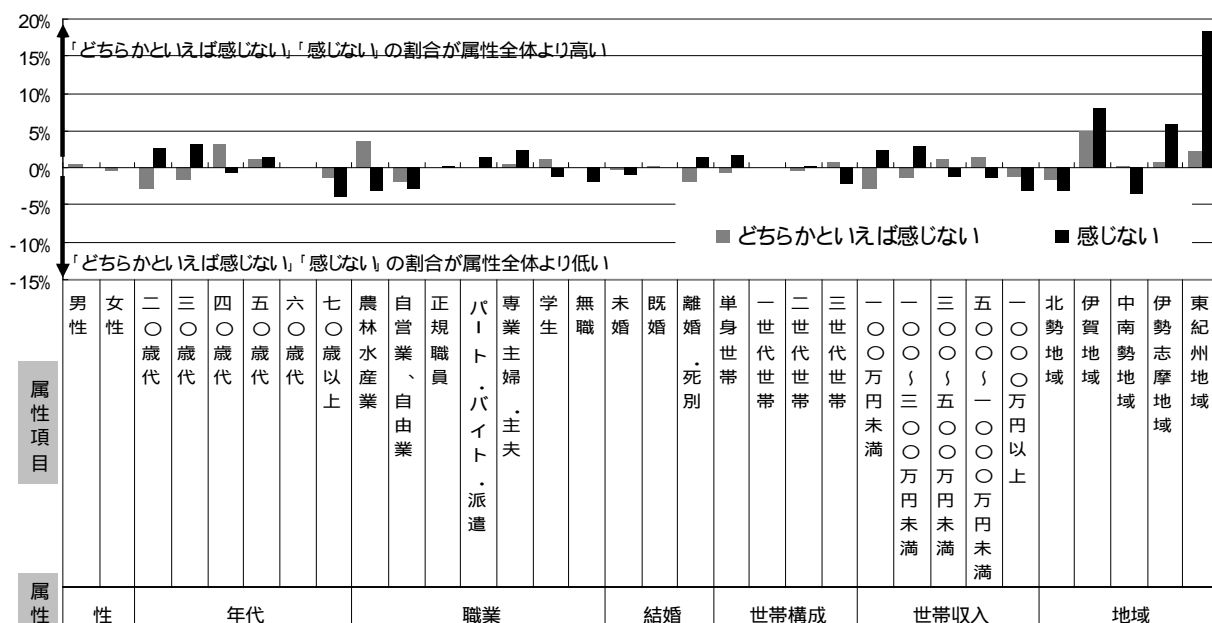
図表 : 県民の皆さんがどのくらい実感しているか

(問2-16におけるそれぞれの回答の割合。「不明」及び「わからない」の回答を除いた場合の回答割合も並記)



図表 : 実感していない層はどの人たちか

(「どちらかといえば感じない」と「感じない」における、属性ごとの、属性全体とそれぞれの属性項目の回答割合の差)



図表 : 実感している層と実感していない層(属性全体と各属性項目の回答割合の差のうち、統計的に有意な差がある属性項目)

	属性全体より回答割合が高い	属性全体より回答割合が低い
感じる		
どちらかといえば感じる	北勢地域	伊賀地域、伊勢志摩地域、東紀州地域
どちらかといえば感じない		
感じない	伊賀地域、伊勢志摩地域、東紀州地域	

【要点】

道路や公共交通機関等が整っているかどうかの実感については、「感じる」と「どちらかといえば感じる」を合計した「実感している層」の割合は37.5%、「どちらかといえば感じない」と「感じない」を合計した「実感していない層」の割合は55.9%となっており、「実感していない層」が「実感している層」よりかなり多くなっています。

特に、“東紀州地域”において「実感していない層」が非常に多く、“伊賀地域”、“伊勢志摩地域”においても多くなっています。

第3章 幸福感と他の実感の関係

分析の考え方

「幸福感」（問1）と「地域や社会の状況についての実感」（問2）及び「日ごろの暮らしについての実感」（問3）との関係について、また、問2問3の設問間の関係について、統計分析の手法により指標化を行い、どの項目が幸福感に影響を与えているのか、幸福感の向上に関して重要な項目は何か、といった観点から考察を行いました。

具体的には、次の二つの手法で分析しました。

- ・ 相関係数を算定し、二つの変数の相関関係を調べる。
- ・ 単回帰分析のモデルにおける回帰係数、決定係数を算定し、一方の変数の増減が他方の変数にどのくらい影響を与えるか調べる。

なお、本章では、母集団（県民全体）に関する推定は行わず、標本（有効回答のあった5710人）に限定した分析としました。

〔用語解説〕

相関係数 詳細は資料編10～11頁に掲載

「相関係数」は、二つの変数(いろいろな値をとりうるもの)の直線的な関係の強さを表す指標で、-1から+1までの値をとります。一方の変数の値が大きいほど他方の変数の値も大きくなる傾向があるとき、「相関係数」は正となり、正の相関関係があると言います。

今回の場合、相関係数が1に近いほど、幸福感と他の実感の相関関係は強くなります。

回帰分析・回帰係数・決定係数 詳細は資料編11頁に掲載

二つの変数について一方の変数の変化が他方の変数に与える影響を調べたりする場合、その方法の一つに回帰分析があります。回帰分析では、観測されたデータから「 $y = ax + b$ 」で表される回帰直線(xが変化するとyがどれだけ変化するかという関係を表す)を推定し、予測等を行います。このaが「回帰係数(=直線の傾き)」です。「決定係数」は、xがyをどの程度説明しているのかを表します。

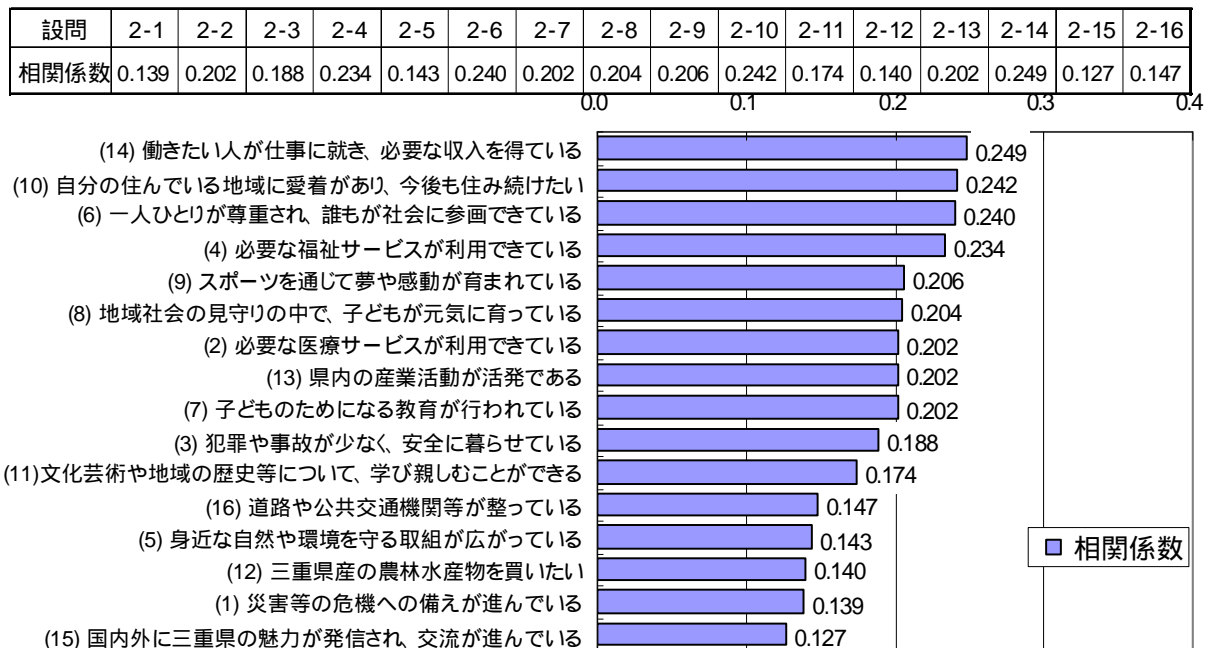
今回の場合、他の実感の変化が、幸福感にもたらす変化が大きいほど、回帰係数の値が大きくなります。

分析結果

1 問1と問2の関係について

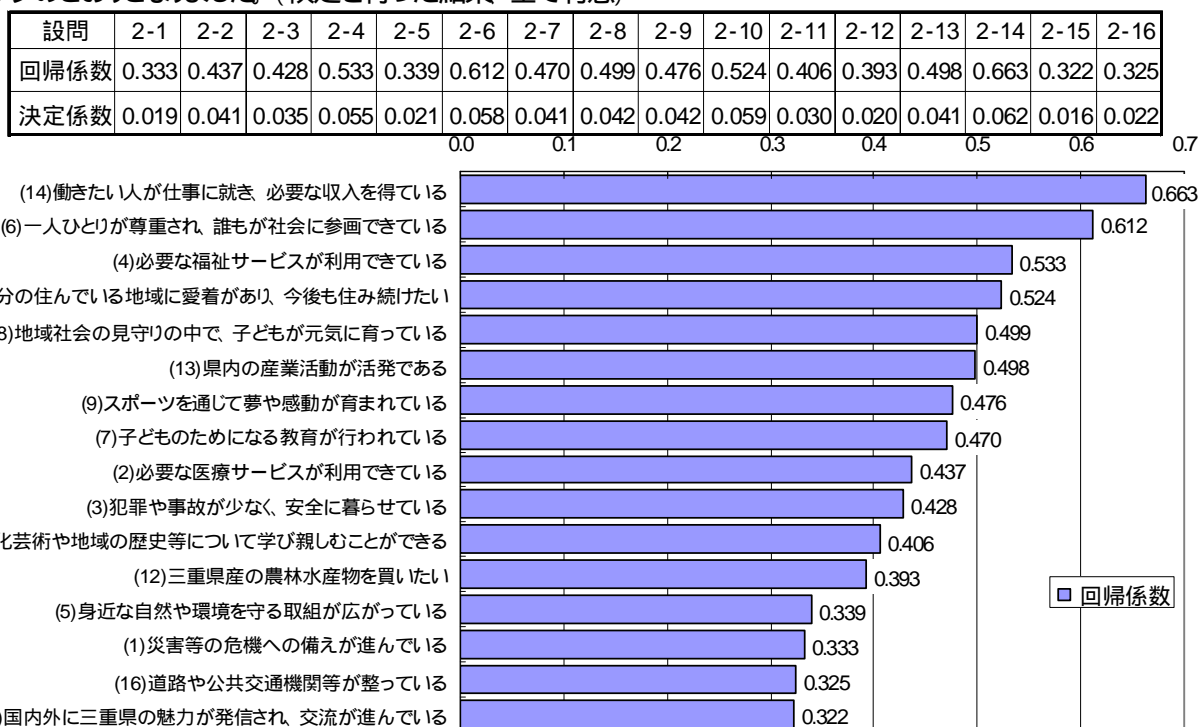
(1) 問1と問2の相関係数

問1(幸福感)と問2(地域や社会の状況についての実感)の各設問の組み合わせについて、相関係数を算定したところ、その結果は下表のとおりで、相関係数が高い設問の順に並べると下のグラフのとおりとなりました。(検定を行った結果 全て有意)



(2) 問1と問2の回帰分析

(1)の結果から、問1と問2の各設問の間に一定の相関関係があることが判明したことを踏まえ、回帰係数と決定係数を算定したところ、その結果は下表のとおりで、回帰係数が高い設問の順に並べると下のグラフのとおりとなりました。(検定を行った結果 全て有意)



【要点】

問1（幸福感）と問2（地域や社会の状況についての実感）の各設問の組み合わせについては、相関係数が0.1~0.3の範囲であることから、正の相関関係があり、問2の各設問について実感している人ほど幸福感が高いという関係にあります。

相関係数が比較的高い問2の設問を、高い順に並べると以下のとおりです。

- 「2-14 働きたい人が仕事に就き、必要な収入を得ている」
- 「2-10 自分の住んでいる地域に愛着があり、今後も住み続けたい」
- 「2-6 一人ひとりが尊重され誰もが社会に参画できている」
- 「2-4 必要な福祉サービスが利用できている」

16の「地域や社会の状況についての実感（幸福実感指標に係る実感）」のうち、これらの設問に係る実感は、幸福感との相関関係が比較的に強いと考えられます。

問1と問2の各設問の組み合わせに係る回帰係数は、0.3~0.7の範囲であり、特に問2の次の設問が高くなっています。例えば、2-14の回帰係数は0.663であり、2-14の回答が、「どちらかといえば感じない」から「どちらかといえば感じる」へと一段階上がると、幸福感は0.663点上がるという関係にあることを意味しています。

- 「2-14 働きたい人が仕事に就き、必要な収入を得ている」
- 「2-6 一人ひとりが尊重され誰もが社会に参画できている」

これらの設問は、他の問2の設問に比べて、その回答の変化が幸福感に与える影響が特に大きいことから、これらの設問に係る実感が幸福感に与える影響も同様に大きいと考えられます。

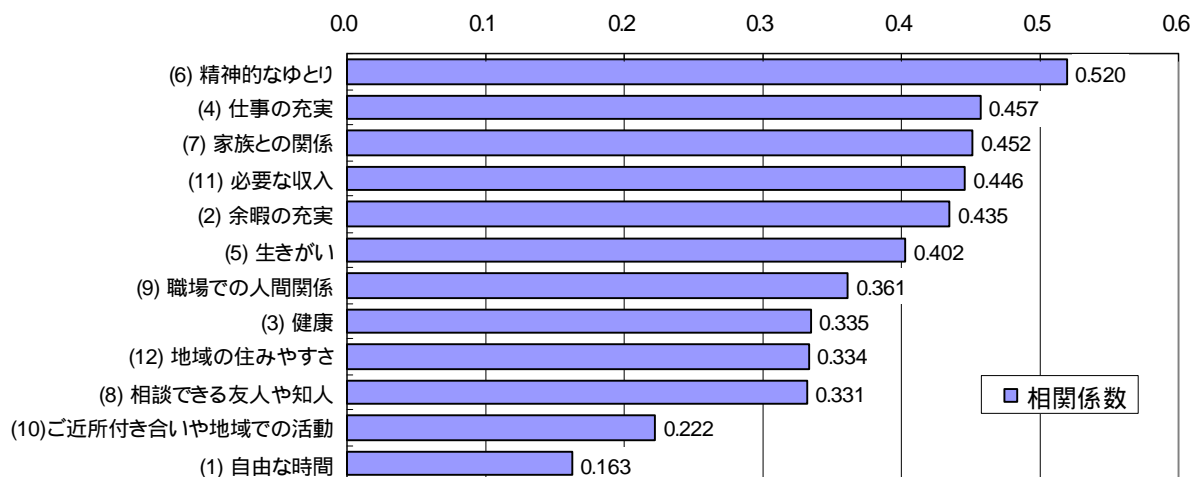
一方、各組み合わせとも決定係数の値が、0.01~0.07の範囲にとどまっていることから、個々の「地域や社会の状況についての実感（幸福実感指標に係る実感）」が幸福感に一定の影響を及ぼすものの、県民の幸福感は「地域や社会の状況についての実感（幸福実感指標に係る実感）」も含むさまざまな要素で構成されている、と言えます。

2 問1と問3の関係について

(1) 問1と問3の相関係数

問1(幸福感)と問3(日ごろの暮らしについての実感)の各設問の組み合わせについて、相関係数を算定したところ、その結果は下の表のとおりで、相関係数が高い設問の順に並べると下のグラフのとおりとなりました。(検定を行った結果 全て有意)

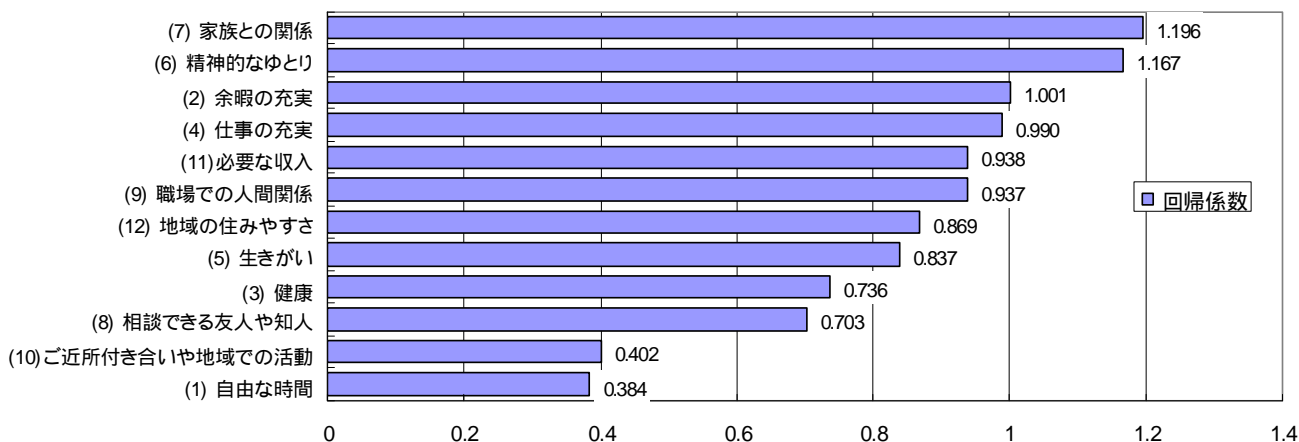
設問	3-1	3-2	3-3	3-4	3-5	3-6	3-7	3-8	3-9	3-10	3-11	3-12
相関係数	0.163	0.435	0.335	0.457	0.402	0.520	0.452	0.331	0.361	0.222	0.446	0.334



(2) 問1と問3の回帰係数

(1)の結果から、問1と問3の各設問の間に一定の相関関係があることが判明したことを踏まえ、回帰係数と決定係数を算定したところ、その結果は下の表のとおりで、回帰係数が高い設問の順に並べると下のグラフのとおりとなりました。(検定を行った結果 全て有意)

設問	3-1	3-2	3-3	3-4	3-5	3-6	3-7	3-8	3-9	3-10	3-11	3-12
回帰係数	0.384	1.001	0.736	0.990	0.837	1.167	1.196	0.703	0.937	0.402	0.938	0.869
決定係数	0.027	0.189	0.112	0.209	0.162	0.270	0.204	0.110	0.130	0.049	0.199	0.112



【要点】

問1(幸福感)と問3(日ごろの暮らしについての実感)の各設問の組み合わせについては、相関係数が0.1~0.6の範囲であることから、正の相関関係があり、問3の各設問について肯定的に感じている人ほど幸福感が高いという関係にあります。

相関係数が比較的高い問3の設問を、高い順に並べると以下のとおりです。

「3-6 精神的なゆとり」

「3-4 仕事の充実」

「3-7 家族との関係」

「3-11 必要な収入」

「3-2 余暇の充実」

12の「日ごろの暮らしについての実感」のうち、これらの設問に係る実感は、幸福感との相関関係が比較強く、中でも、「3-6」は唯一0.5を超えており、特に強い関係があると考えられます。

問1と問3の各設問の組み合わせに係る回帰係数は、0.3~1.2の範囲であり、特に問3の次の設問が高くなっています。例えば、3-7の回帰係数は1.196であり、3-7の回答が「どちらかといえば良好でない」から「どちらかといえば良好である」へと一段階上がると、幸福感は1.196点上がるという関係にあることを意味しています。

「3-7 家族との関係」

「3-6 精神的なゆとり」

これらの設問は、他の問3の設問に比べて、その回答の変化が幸福感に与える影響が特に大きいことから、これらの設問に係る実感が幸福感に与える影響も同様に大きいと考えられます。

問1と問3の相関係数や回帰係数は、問1と問2(地域や社会の状況についての実感)のそれらと比べ全般的に高くなっており、県民の幸福感は、「地域や社会の状況についての実感(幸福実感指標に係る実感)」よりも、「日ごろの暮らしについての実感」との関係がより強いと考えられます。

また、問1と問3の相関係数や回帰係数の値は、問1と問2のそれらと比べ、バラツキがあり、12の「日ごろの暮らしについての実感」については、幸福感との関係の強さに大きな差があると言えます。

決定係数の値については、0.04~0.27と、問1と問2の場合に比べ広い範囲にあります。問1と問2の場合と同様、個々の「日ごろの暮らしについての実感」が幸福感に一定の影響を及ぼすものの、県民の幸福感は「日ごろの暮らしについての実感」も含むさまざまな要素で構成されている、と言えますが、「日ごろの暮らしについての実感」に関しては、「3-6」をはじめ、比較的強い影響を及ぼすものが見られます。

3 問2の設問間の相関関係について

問2(地域や社会の状況についての実感)の設問間の相関係数を算定したところ、その結果は、下表のとおりとなりました。(検定を行った結果 全て有意)

	2-1	2-2	2-3	2-4	2-5	2-6	2-7	2-8	2-9	2-10	2-11	2-12	2-13	2-14	2-15	2-16
2-1		0.314	0.173	0.295	0.346	0.292	0.296	0.237	0.213	0.165	0.245	0.096	0.262	0.169	0.285	0.203
2-2			0.296	0.536	0.273	0.340	0.364	0.292	0.203	0.221	0.254	0.131	0.271	0.272	0.207	0.269
2-3				0.362	0.218	0.302	0.283	0.300	0.154	0.193	0.130	0.107	0.145	0.215	0.133	0.170
2-4					0.383	0.424	0.397	0.350	0.252	0.268	0.330	0.133	0.289	0.301	0.293	0.277
2-5						0.458	0.401	0.312	0.276	0.194	0.351	0.130	0.325	0.245	0.335	0.222
2-6							0.503	0.379	0.280	0.236	0.348	0.110	0.323	0.377	0.352	0.250
2-7								0.549	0.312	0.233	0.318	0.112	0.358	0.333	0.350	0.289
2-8									0.385	0.272	0.279	0.196	0.301	0.282	0.262	0.249
2-9										0.233	0.313	0.209	0.284	0.222	0.285	0.222
2-10											0.362	0.242	0.205	0.173	0.175	0.211
2-11												0.210	0.361	0.255	0.355	0.241
2-12													0.256	0.087	0.150	0.103
2-13														0.393	0.446	0.294
2-14															0.355	0.275
2-15																0.326
2-16																

また、上記結果から、16の設問の相互の関係性を把握するため、相関係数を五つの段階に区分し、各設問の相関係数の数を下表に整理しました。さらに傾向がより分かりやすくなるよう、0.3以上の相関係数について、設問毎にそれらの数を示すとともに、次ページに図示しました。

問2の設問	0.5以上	0.4以上 0.5未満	0.3以上 0.4未満	0.2以上 0.3未満	0.2未満	0.3以上
2-1 災害等の危機への備えが進んでいる			2	9	4	2
2-2 必要な医療サービスが利用できている	1		3	10	1	4
2-3 犯罪や事故が少なく、安全に暮らしている			3	4	8	3
2-4 必要な福祉サービスが利用できている	1	1	6	6	1	8
2-5 身近な自然や環境を守る取組が広がっている		2	6	5	2	8
2-6 一人ひとりが尊重され、誰もが社会に参画できている	1	2	7	4	1	10
2-7 子どものためになる教育が行われている	2	1	7	4	1	10
2-8 地域社会の見守りの中で、子どもが元気に育っている	1		6	7	1	7
2-9 スポーツを通じて夢や感動が生まれている			3	11	1	3
2-10 自分の住んでいる地域に愛着があり、今後も住み続けたい			1	9	5	1
2-11 文化芸術や地域の歴史等について、学び親しむことができる			8	6	1	8
2-12 三重県産の農林水産物を買いたい				4	11	0
2-13 県内の産業活動が活発である		1	6	7	1	7
2-14 働きたい人が仕事に就き、必要な収入を得ている			5	7	3	5
2-15 国内外に三重県の魅力が発信され、交流が進んでいる		1	6	5	3	7
2-16 道路や公共交通機関等が整っている			1	12	2	1

【要点】

問2(地域や社会の状況についての実感)の設問間については、相関係数が0~0.6の範囲であることから、正の相関関係があり、ある設問について実感している人ほど別の設問についても実感しているという関係にあります。また、設問によって相関係数は大きく異なり、他の設問との関係が強いものから弱いものまで多様です。

次の設問は、他の設問との相関関係が比較的強くなっています。

- 「2-4 必要な福祉サービスが利用できている」
- 「2-5 身近な自然や環境を守る取組が広がっている」
- 「2-6 一人ひとりが尊重され、誰もが社会に参画できている」
- 「2-7 子どものためになる教育が行われている」

中でも、「2-6」と「2-7」は、特に強いと言えます。

一方、次の設問は、他の設問との相関関係が弱くなっています。

- 「2-12 三重県産の農林水産物を買いたい」

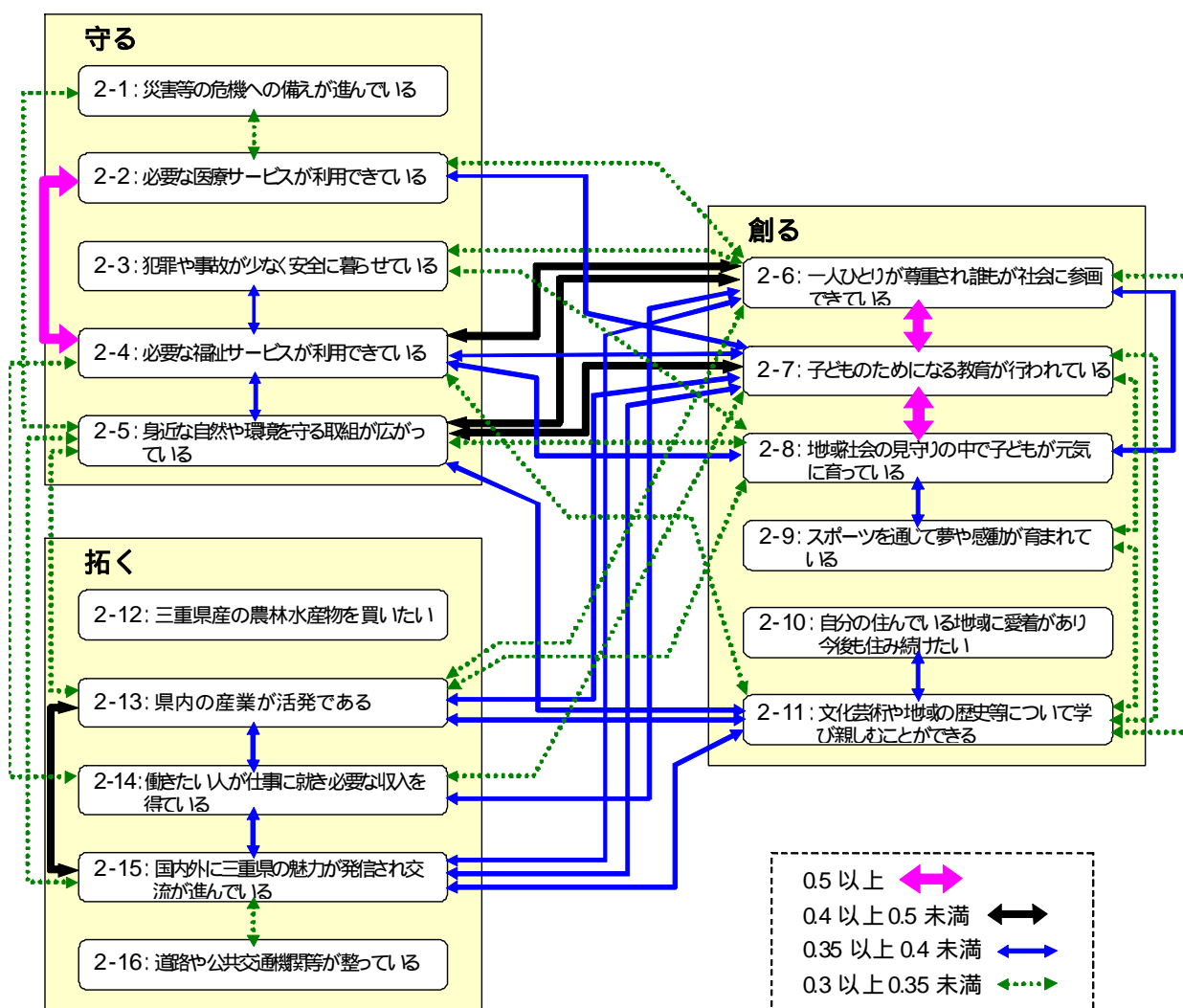
【要点】

また、各設問の幸福実感指標が対応する政策分野が位置づけられている政策展開の基本方向（三つの柱： 守る、 創る、 拓く）ごとにグループ化し、設問間の関係を見ると、一つの基本方向の中で、相互の関係が強い設問群があり、それらについては、他の基本方向の設問間との関係も比較的強い傾向が見られます。例えば

- 「2-6 一人ひとりが尊重され、誰もが社会に参画できている」
- 「2-7 子どものためになる教育が行われている」
- 「2-8 地域社会の見守りの中で子どもが元気に育っている」
- 「2-13 県内の産業が活発である」
- 「2-14 働きたい人が仕事に就き必要な収入を得ている」
- 「2-15 国内外に三重県の魅力が発信され交流が進んでいる」

問2の設問間の相関関係（相関係数0.3以上）

問2の設問間の相関関係について、設問をそれぞれの幸福実感指標が対応する政策分野が位置づけられている政策展開の基本方向（三つの柱： 守る、 創る、 拓く）ごとにグループ化したうえで、相関係数0.3以上のものについて図示しました。



4 問3の設問間の相関関係について

問3(日ごろの暮らしについての実感)の設問間の相関係数を算定したところ、その結果は、下表のとおりとなりました。(検定を行った結果 全て有意)

	3-1	3-2	3-3	3-4	3-5	3-6	3-7	3-8	3-9	3-10	3-11	3-12
3-1		0.489	0.090	0.086	0.082	0.401	0.154	0.088	0.108	0.065	0.109	0.138
3-2			0.335	0.373	0.398	0.553	0.331	0.298	0.286	0.177	0.270	0.280
3-3				0.412	0.311	0.374	0.272	0.249	0.321	0.126	0.252	0.249
3-4					0.416	0.440	0.276	0.288	0.500	0.208	0.448	0.282
3-5						0.429	0.318	0.372	0.309	0.226	0.250	0.233
3-6							0.426	0.333	0.361	0.201	0.405	0.305
3-7								0.345	0.351	0.181	0.253	0.299
3-8									0.378	0.245	0.221	0.232
3-9										0.230	0.294	0.261
3-10											0.159	0.211
3-11												0.281
3-12												

また、上記結果から、12の設問の相互の関係性を把握するため、相関係数を五つの段階に区分し、各設問の相関係数の数を下表に整理しました。さらに傾向がより分かりやすくなるよう、0.3以上の相関係数について、設問毎にそれらの数を示すとともに、次ページに図示しました。

問3の設問	0.5以上	0.4以上 0.5未満	0.3以上 0.4未満	0.2以上 0.3未満	0.2未満	0.3以上
3-1 自由な時間		2			9	2
3-2 余暇の充実	1	1	4	4	1	6
3-3 健康		1	4	4	2	5
3-4 仕事の充実	1	4	1	4	1	6
3-5 生きがい		2	5	3	1	7
3-6 精神的なゆとり	1	5	4	1		10
3-7 家族との関係		1	4	4	2	5
3-8 相談できる友人や知人			4	6	1	4
3-9 職場での人間関係	1		5	4	1	6
3-10 ご近所付き合いや地域での活動				6	5	0
3-11 必要な収入		2		7	2	2
3-12 地域の住みやすさ			1	9	1	1

【要点】

問3(日ごろの暮らしについての実感)の設問間については、相関係数が0.01~0.6の範囲であることから、正の相関関係があり、ある設問について肯定的に感じている人ほど別の設問についても肯定的に感じているという関係にあります。また、設問によって相関係数は大きく異なり、他の設問との関係が強いものから弱いものまで多様です。

次の設問は、他の設問との相関関係が比較的強くなっています。

- 「3-6 精神的なゆとり」
- 「3-4 仕事の充実」
- 「3-2 余暇の充実」
- 「3-9 職場での人間関係」
- 「3-5 生きがい」

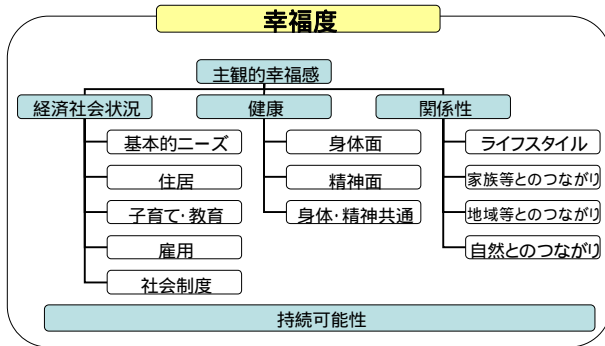
中でも、「3-6」は、特に強いと言えます。

一方、次の設問は、他の設問との相関関係が弱くなっています。

- 「3-10 ご近所付き合いや地域での活動」

問3 の設問間の相関関係 (相関係数 0.3 以上)

問3 の設問間の相関関係について、内閣府「幸福度に関する研究会」における幸福度指標案の体系を参考に分類・グループ化し、相関係数0.3 以上のものについて図示しました。

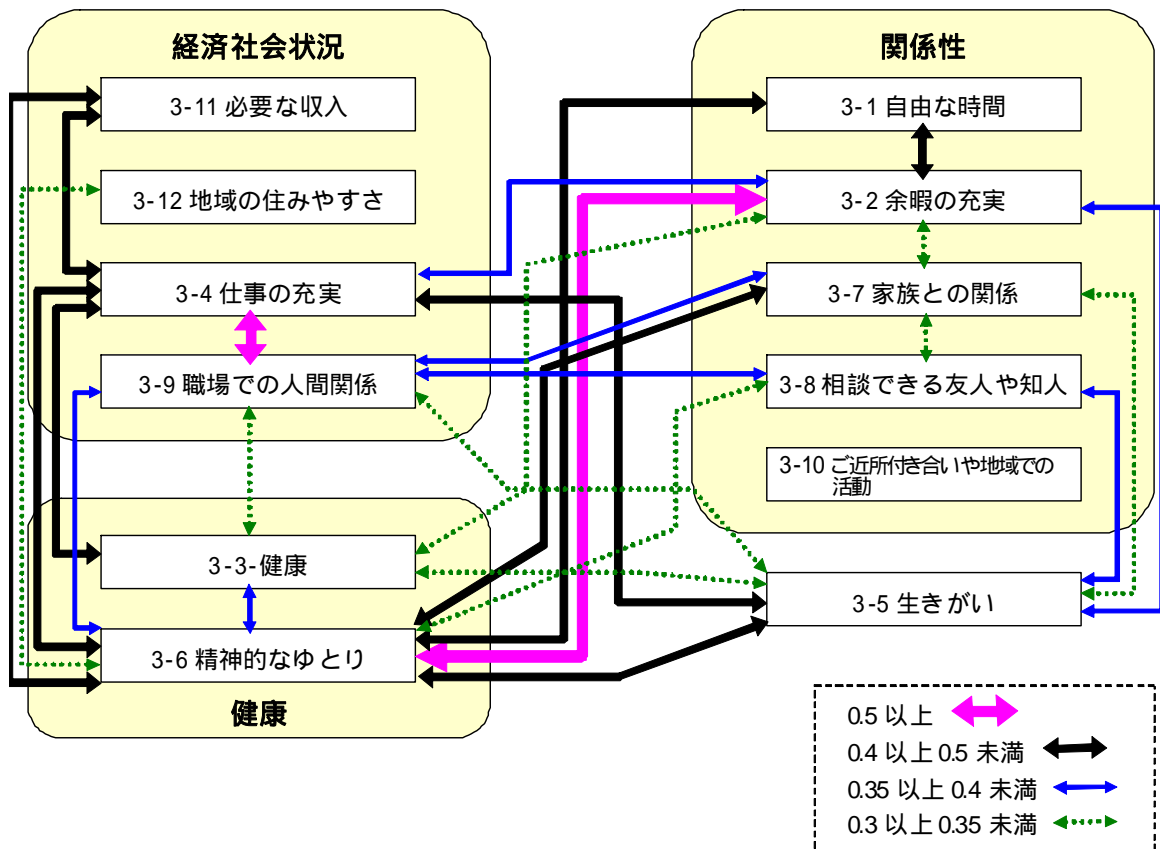


「幸福度に関する研究会」における幸福度指標案の体系(研究会報告をもとに戦略企画課が作成)

「幸福度」に関連する項目

「生きがい」については、

内閣府研究会幸福度指標案体系の分類項目		問3の設問項目
経済社会状況	基本的ニーズ	必要な収入
	住居	地域の住みやすさ
	雇用	仕事の充実 職場での人間関係
健康	身体面	健康
	精神面	精神的なゆとり
関係性	ライフスタイル	自由な時間 余暇の充実
	家族等とのつながり	家族との関係 相談できる友人や知人
	地域等とのつながり	ご近所付き合いや地域での活動



第4章 県民の幸福実感向上のための政策課題等

政治や行政の目的は、人々が幸福になることです。人々が幸福を実感できるように、経済成長や社会資本の充実だけでなく、内面的なものにもこれまで以上に着目し、政策を進める必要があると考えられます。

第1章から第3章では、県民の幸福感の現状、地域や社会の状況についての実感の状況、さらには幸福感と他の実感との関係について、データを分析し、特徴や傾向の抽出などを行ってきました。

この結果、幸福実感に関して、これまで気付かなかったことが明らかになったり、何となく感じていたことがデータで裏付けられたりするなど、一定の成果が得られました。

第4章では、どの項目が県民の幸福実感により影響を与えるのか、あるいは、どの政策が幸福実感的向上によりつながるのかといった視点から、これまでの分析データをもとに、県民の幸福実感を高めるための政策課題などについて考察を行い、特筆すべき事項を以下に掲げました。

これらの事項については、県民の幸福実感に関し、統計的な分析から得られた仮説や示唆であり、今後の政策議論の材料として活用されることが期待されます。

一方で、今回の調査結果の範囲内で考察したものであることや、こうした意識調査の結果が社会経済情勢に左右される可能性があり経年変化を見ていく必要があることなど、留意すべき点もあります。

1 県民の幸福実感により影響を与えている項目と課題

(1) 結婚

既婚者は未婚者より幸福感が高くなっていることなどから、“結婚”が県民の幸福実感に大きな影響を与えていると考えられます。

また、平成21年度に県が実施した県内の30代の男女1,600人に対するアンケート調査⁽¹⁾では、未婚者の約8割は結婚意向があり、結婚していない理由として、男女ともに最も多いのは「出会いがない」、次いで「理想の相手に出会っていない」となっています。

このため、県民の幸福実感を高めるため、行政としても婚活支援などの取組に力を入れることが重要になってきているのではないかと考えられます。

(1) 希望が持てる地域社会実現に向けた基礎調査(県政策部企画室 アンケート調査平成21年12月実施)

(2) 就労と収入

「働きたい人が仕事に就き、必要な収入を得ている」と実感することや「必要な収入」があると感じることと幸福感との関係性は強く、また、パート・バイト・派遣や無職の幸福感が低いことなどから、“就労や収入”の不安定さは県民の幸福実感を押し下げる要因であると考えられます。

特に、20歳代のパート・バイト・派遣や20歳代から50歳代までの無職は幸福感が低く、日常生活を営むうえで必要な収入があると感じる割合も低くなっています。

また、前記の県の調査でも、結婚していない理由として、特に男性では「収入が少ない」や「仕事が不安定」が多くなっています。

このため、若者が結婚に踏み切れるよう後押しするためにも、若者の雇用対策に特に注力することが、県民の幸福実感を高めるうえで重要と考えられます。

(3) 家族

「家族関係」は幸福感を判断する際に重視した事項の中で最も高く、幸福感との関係も強くなっています。また、30歳から60歳の単身世帯の幸福感が低く、70歳以上の三世帯世帯の幸福感が高いなど、世帯構成と幸福感との関係性も見られます。

こうしたことから、“家族”は、県民の幸福実感に大きな影響を与えているものの1つと考えられます。

東日本大震災以降、“家族”の絆や支え合いが再認識されるようになりましたが、県民の幸福実感の視点からも“家族”の大切さが確認されたといえます。

未婚化・晩婚化が進み単身世帯が増加するなど、家族の姿は変容していますが、県民の幸福実感を高める観点から、行政としても家族のあり方などについて認識を深めるとともに、地域社会全体が暮らしの様々な場面で“家族”をサポートすることが重要であると考えられます。

(4) 精神的なゆとり

“精神的なゆとり”は幸福感との関係が強く、「仕事の充実」や「必要な収入」、「自由な時間」や「余暇の充実」、「家族との関係」などの他の設問項目との関係も強くなっています。このため、“精神的なゆとり”は県民の幸福実感に大きな影響を与えていると考えられます

一方で、“精神的なゆとり”は個々人の内面的なものであることから、政策への反映などを検討するのであれば、それを左右する要素は何かを具体的に見ていくことが重要です。

2 政策的アプローチから考察した取組方向

(1) 幸福実感日本一に向けて考慮すべき取組

「働きたい人が仕事に就き、必要な収入を得ている」や「一人ひとりが尊重され、誰もが社会に参画できている」は、県民の幸福感に与える影響が特に大きいことから、これらの実感に関わる政策分野の取組(就労支援や男女共同参画など)は、幸福実感日本一をめざすうえで考慮すべき取組であると考えられます。

なお、「働きたい人が仕事に就き、必要な収入を得ている」については、就労支援とともに産業の振興などによる雇用の創出に取り組む必要があると考えられます。

また、「一人ひとりが尊重され、誰もが社会に参画できている」については、既婚女性の正規職員の幸福感が非常に高いことなども踏まえ、議論を深めていく必要があると考えられます。

(2) 総合的な推進がより効果的な政策

問2に関して相互の関係が強い設問群(下記2-6~8 2-13~15)が見られましたが、それらの設問に係る実感に対応する下記の政策分野(*)については連携を意識し、より総合化を図ることなどにより、幸福実感指標を高める相乗効果を発揮させることができるのではないかと考えられます。

- * 人権の尊重と多様性を認め合う社会 (2-6 一人ひとりが尊重され、誰もが社会に参画できている)
- * 教育の充実 (2-7 子どものためになる教育が行われている)
- * 子どもの育ちと子育て (2-8 地域社会の見守りの中で子どもが元気に育っている)

- * 強じんて多様な産業 (2-13 県内の産業が活発である)
- * 雇用の確保 (2-14 働きたい人が仕事に就き必要な収入を得ている)
- * 世界に開かれた三重 (2-15 国内外に三重県の魅力が発信され交流が進んでいる)

(3) 教育などに対する経済的負担

世帯収入が多いほど幸福感は高い傾向にあります。その中で、世帯収入が500万円未満の40歳代と50歳代は、他の年代と比べ幸福感が低く、日常生活を営むうえで必要な収入があると感じる割合も少なくなっています。

一方、国の調査⁽²⁾では、子どもを育てていて負担に思うことや悩みで最も多いのは「子育ての出費がかさむ」との結果が出ています。

こうしたことから、教育や子育てなどにお金がかかることが県民の幸福実感を押し下げているのではないかと考えられます。

このように、収入の多寡だけではなく、どのような経済的負担が背景にあるのかを見ていくことも重要であり、県民の幸福実感を高めるには、収入を増加させるだけではなく、経済的な負担が軽減されるような方策も有効な選択肢であると考えられます。

(2) 第8回21世紀出生児縦断調査(厚生労働省 平成21年1月・7月実施)

(4) 高齢者の活力を生かした「協創」の三重づくり

日ごろの暮らしについての実感の中で、「自由な時間」は幸福感との関係は弱い一方、「余暇の充実」は幸福感との関係が強くなっています。その中で、60歳以上は自由な時間がある一方で、余暇はそれほど充実していない傾向が見られます。

今後、さらなる高齢化の進展が見込まれる中で、県民力による「協創」の三重づくりを進めるためには、比較的自由な時間のある高齢者の方々に参画していただき、活力や知恵を生かしていただくことが重要であり、そのことが、高齢者の余暇の充実、ひいては県民の幸福実感を高めることにつながるのではないのでしょうか。

(5) 今後の政策展開を考えるうえでのキーワード

暮らしの実感に関する設問の中で、「精神的なゆとり」の他にも「仕事の充実」、「家族との関係」、「余暇の充実」は、幸福感との関係が比較的強く、他の多くの設問との関連も強いことから、幸福実感を高める上で、重要な指標と位置づけられると考えられます。

また、これらの4つの項目は、内閣府「幸福度に関する研究会」の幸福度指標試案において、「健康(精神面)」、「雇用」、「家族等とのつながり」、「ライフスタイル」として体系化されており、今後の政策展開を考えるうえで、特に着目すべきキーワードといえるのではないのでしょうか。

(6) 幸福実感指標の現状からみた課題等

幸福感については地域差があまり見られませんが、16の幸福実感指標の中には、地域差の見られる項目があります。

16の幸福実感指標の中で、「感じない」割合の地域差が見られるのは下記の項目であり、その背景や要因を検討していくことも重要と考えます。

項目	「感じない」割合の多い地域 ⁽³⁾
必要な医療サービスができていない	伊賀
県内の産業活動が活発である	伊勢志摩、東紀州
働きたい人が仕事に就き、必要な収入を得ている	伊勢志摩、東紀州
道路や公共交通機関が整っている	伊賀、伊勢志摩、東紀州

(3) 「どちらかといえば感じない」の割合は考慮していません。

「災害等の危機への備えが進んでいる」と感じない割合は、70歳以上が低く、20歳代で高くなっています。

平成23年度防災に関する県民意識調査結果でも、年齢層が低いほど海溝型地震への関心が低くなっていることなどから、特に若年層を対象に「自分の命は自分で守る」という自助の意識を高めしていくための取組が必要と考えられます。

「スポーツを通じて夢や感動が育まれている」と感じる割合は、20歳代と30歳代で高くなっていますが、50歳代以降では平均を下回る傾向が見られます。

今後、若者から高齢者まで幅広い年齢層の県民がスポーツに親しめる機会の提供や、地域で気軽にスポーツに取り組める環境づくりなどの取組がより重要になってくると考えられます。

「国内外に三重県の魅力が発信され、交流が進んでいる」と感じない割合は、70歳以上が低い一方、20歳代から40歳代が高く、若年層でより問題意識が高いと考えられます。

今後、「世界に開かれた三重」の政策をより強力に推進していくためには、若年者の参画がより必要であると考えられます。

3 その他、今後の検討課題

(1) 設問のあり方

「地域や社会の状況についての実感」に関する設問のうち、「自分の住んでいる地域に愛着があり、今後も住み続けたい」や「三重県産の農林水産物を買いたい」について、また、「日ごろの暮らしについての実感」に関する設問のうち、「ご近所付き合いや地域での活動をしている」については、他の設問との関連が非常に弱くなっており、その要因を探る必要があると考えられます。

(2) 子育てや子どもを持つことと幸福感との関係

これまでの分析の中で、結婚や就職などが幸福感に影響を与え、また子育て、教育についても何らかの影響があると指摘してきました。

少子高齢化の進展、人口減少社会への対応が大きな課題となる中で、子育てや子どもを持つことと幸福感の関係などを見ていくことは、今後の政策を考えるうえで有意義と考えられます。

平成17年に国が実施した意識調査⁽⁴⁾では、「子どもを持つことで豊かな人生を送ることができるか」との質問に対し、66.3%の方が「そう思う」と答えており、また、本年3月に国が実施した幸福感に関する調査⁽⁵⁾では、子どもの数別に現在の幸福感を見たところ、「子どもがいない」と回答した人の幸福感が最も低く、人数が増えるにつれ、やや増加しています。

みえ県民意識調査においても、全体の質問数を増やすことなく、次回以降の調査の中で、子育てや子どもを持つことと幸福実感の関係についても分析できるよう質問を工夫すべきであると考えられます。

(4) 平成16年度国民生活選好度調査(内閣府 平成17年1~2月実施)

(5) 第1回生活の質に関する調査(内閣府経済社会総合研究所 平成24年3月実施)

(3) 女性の就労促進について

女性の幸福感を職業別にみると専業主婦が高くなっていますが、さらに既婚女性の視点で幸福感を詳細にみたところ、既婚女性の正規職員は専業主婦よりも幸福感が高い傾向が見られます。

このため、年代や収入など他の条件を同一にしたとき、女性が働くことが幸福感にどのような影響を与えるのか、研究していくことも重要と考えられます。

また、女性が働くことに関して、わが国が、今後の生産年齢人口の減少に伴う労働力不足や消費のさらなる低迷を乗り越えていくためには、女性の就労促進が必要であるとの指摘があります。

しかしながら、今回の調査における60歳代までの女性の無業者(専業主婦と無職)の構成割合を見たところ、専業主婦の占める割合が高く、また、前述の通り、専業主婦の幸福感は高くなっています。

このため、今後三重県においても、女性全体の就労を促進するという方向を目指すとした場合には、女性が働き続けることのできる環境づくり等はもちろんのこと、専業主婦をターゲットにした取組も必要と考えられますが、その前提として、就労意欲があるのか、意欲があるとすれば就労を阻害する要因は何かといった専業主婦の就労に対する意識を確認することが重要であると考えられます。

4 「幸福実感指標」の活用に向けて

(1) 「幸福実感指標」の位置づけ

「みえ県民ビジョン」では、『幸福実感日本一』の三重をめざすことから、政策分野ごとに16の「幸福実感指標」を設定し、「県民指標」に加えて、「幸福実感指標」の推移を把握することで、行動計画全体としての進行管理に務めることとしています。

「幸福実感指標」は、県の施策の達成状況や評価を行うための指標ではなく、達成すべき目標値も設定されていません。

県の施策(取組)が進めば、比例して「幸福実感指標」の数値も上るという直接的な関係にあるものではありませんが、県民の皆さんの幸福実感を把握し、全体としての進行管理に活用することは重要であると考えます。

(2) 活用の考え方(進行管理の考え方)

「幸福実感指標」の具体的な活用については、以下の2つのアプローチが考えられます。

16の「幸福実感指標」における県民の皆さんの実感を属性ごとにクロス集計を行い分析し、「実感していない」割合が高い属性区分を把握することで、今後、県として注視していくべき課題を考える際のひとつの手掛かりとする。

それぞれの「幸福実感指標」の推移を把握する中で、特定の「幸福実感指標」について、「実感している」割合が低位のまま推移している場合や、急激な増減や一定の増加・減少トレンドが確認できた場合に、その原因を分析し、当該政策・施策の見直しの参考とする。

(3) 具体的な活用イメージ

4(2)については、第2章「幸福実感指標の現状」で実際に分析を行い、本章の2(6)～のとおり一定の考察を行ったところです。

(2)については、原因分析の手法として、「幸福実感指標」の推移と、「県民指標」や「活動指標」、その他客観的・主観的指標の推移を比較するとともに、「幸福実感指標」に関連する事件や事故、ニュースの有無などを確認することが考えられます。

なお、「実感している」割合が低位のまま推移しているケースについては、他県の意識調査結果との比較等を行い、指標の性格上、低位であることがやむを得ないものであるかどうかなどについて検討する必要があると考えられます。

意識調査を活用するということ - みえ県民意識調査活用研究会の成果と今後への期待

鳥取大学地域学部教授 小野達也

自治体が実施した住民意識調査の結果データは、情報の宝庫といえます。調査結果を施策に反映させることは当然のこととして、自律的な行政経営が求められる今、徹底活用しないままでおく手はありません。ところが、全国で数多く行われている住民意識調査は、必ずしも十分に活用されておらず、ともすれば宝の持ち腐れになりかねません。このような中、三重県において「県民の幸福実感」を県政運営の重要テーマとして掲げ、それを実際に把握するために毎年意識調査を実施すること、その第1回調査の結果を文字通り徹底的に分析したことはともに大いに注目すべき取り組みです。

住民意識調査を本当に活用しようとするれば、調査結果として何が明らかになったか(あるいは、なかったのか)、その結果と行政の施策との関係はどうか、という2段階の分析が必要になります。みえ県民意識調査活用研究会(以下では「研究会」と呼びます)は今回、上記の について本格的な分析を加えました。

調査結果として、県民全体の幸福感の平均点はもちろん興味深いですが、様々な年代や職業の人たちの幸福感、地域・社会の状況(例・災害への備えは進んでいるか)や暮らしの様々な側面(例・自由な時間はあるか)の実感と幸福感の関係など、様々な集計から豊かな情報が得られます。そして、例えば既婚者の幸福感は全体の平均より高いという調査結果について、それが意味のある差なのかどうか(統計的に有意かどうか)の判定が大変重要です。県民全体についても同じと考えてよいのか、それとも今回の回答者がたまたまそうだったのかもしれないのか、両者の意味は全く違います。

研究会では、属性や各質問の回答の様々な組合せについて網羅的に吟味し(このように緻密な作業は、他の自治体ではなかなか行われていません)、その観察事実の一つ一つについて統計的に有意と言えるかどうかを丁寧に判定しています(このように厳密な手続きは、他の自治体ではほとんど行われたことがないでしょう)。その結果、この研究レポートに述べられている通り、幸福感と結婚、職業、生活実感の関係などについて、大変興味深い事柄が明らかになっています。これは、三重県民(日本人の、といてもよい部分も多そうです)の幸福感の構造を明らかにした画期的な成果といつてよいでしょう。忙しい業務と並行して、このような分析をやり遂げた研究会の皆さんに敬意を表します。

さて、今回の分析結果からは、このレポートの第4章にあるように、様々な仮説や政策対応への示唆が得られます。しかし、今回の意識調査の結果を本当に活用するためには、上記の分析、すなわち県民の意識・幸福実感と行政の各施策との関係をさらに明確にする必要があります。そのためには、次回以降の調査結果も今回同様に徹底分析して県民意識の推移と安定的な構造を明らかにすること、県の施策のロジック(県の各施策が成果をもたらす、幸福実感に繋がるまでの論理)を明らかにし、戦略計画に掲げる「県民指標」「活動指標」と「幸福実感指標」の関係を具体化すること、の2点が必要になるでしょう。

そのためには、持続可能な研究体制を整え、着実に前進されることを期待します。意識調査の活用に関しては、せっかくの取り組みが長続きしなかったり、拙速な結論に振り回されたり(満足度の平均点だけで政策を評価しようとし、点数の上昇下降に一喜一憂するなど)という残念な事例も珍しくありません。今回の成果を踏まえ、ぜひ更なる高みを目指して歩みを進めていただきたいと思います。

研究会開催実績

回	日時	研究会の主な内容	備考
第1回	6月5日(火)	・研究テーマや分析の進め方の検討	
第2回	6月19日(火)	・分析の進捗状況の確認	
第3回	6月22日(金)	・中間報告に向けた分析の進め方の検討 ・統計的な分析手法	小野先生参加
第4回	7月3日(火)	・中間報告に向けた分析の進め方の確認	
第5回	7月10日(木)	・分析の進捗状況の確認	
第6回	7月19日(火)	・中間報告のとりまとめの方向性の検討	
第7回	7月27日(金)	・中間報告(案)の確認 ・最終報告に向けた分析の進め方の検討	小野先生参加
第8回	8月1日(水)	・最終報告に向けた分析の進め方の確認	
第9回	8月29日(水)	・研究レポート(案)の確認	小野先生参加

みえ県民意識調査活用研究会 メンバー

(顧問)

鳥取大学 地域学部 教授 小野 達也

(研究員)

企画課 主査 森 隆裕

企画課 主査 中出 真人

企画課 主事 今井 宗直

政策提言・広域連携課 主幹 長崎 禎和

統計課 分析・情報G 主査 内海 一郎

統計課 分析・情報G 主事 山本 規晴

戦略企画総務課 調整G 副課長 安井 晃

戦略企画総務課 調整G 主査 菅生 和範

戦略企画総務課 調整G 主査 藤田 雄一

事務局

三重県 戦略企画部 戦略企画総務課

〒514-8570 三重県津市広明町13番地

: 059-224-2062

E-mail: sensomu@pref.mie.jp